

博多 103

— 博多遺跡群第143次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第849集

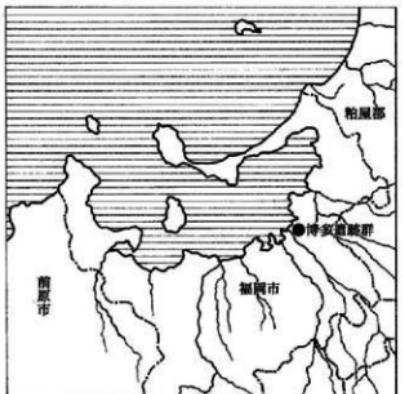
2005

福岡市教育委員会

博多 103

— 博多遺跡群第143次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第849集



遺跡号 HKT-143

遺跡調査番号 0333

2005

福岡市教育委員会



103

SX153 出土 粉青沙器



63



27

SX12、SX68 出土 粉青沙器



SK247 出土 青花



SX149、SK327、SK247 出土 朝鮮產陶器

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査では中世の国際貿易都市として繁栄を極めた博多の姿の一部を明らかにすることができました。調査地点は博多の北側、いわゆる「息の濱」とよばれた地区で中世後半期の15、16世紀にアジアをまたに駆けめぐっていた商人たちの舞台となったところです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた有限会社 岡部商会、株式会社 イチケンをはじめ、関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市博多区綱場町121番において福岡市教育委員会が2003年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧が担当し、遺構図面作製、遺構写真撮影は荒牧が主に行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、相原聰子、荒牧が行い、浄書は遺物を濱石正子、遺構を大石菜美子、荒牧が行った。IVは屋山洋、Vは片多雅樹が執筆、図版作製を行い、他は荒牧が執筆、編集した。
4. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書掲載の遺構図方位は座標北による。
2. 掲載した遺物は通し番号を付している。

* 表紙、扉題字は柴田志乃さんによる

本文目次

Iはじめに.....	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査の経過.....	1
3 調査体制.....	1
II位置と環境.....	2
III調査の記録.....	4
1 土壌.....	4
SK06.....	4
SX68.....	4
SX16.....	4
SX104.....	4
SK18.....	8
SK19.....	9
SK12.....	9
SK197.....	9
SK255.....	9
SX14.....	12
SK27.....	13
SK153.....	15
SX149.....	17
SK201.....	17
SK327、328、329.....	20
SK247.....	22
SK399、SX293.....	24
2 据立柱建物跡.....	25
SB01.....	25
3 溝.....	26
SD15.....	26
4 井戸.....	27
SE01.....	27
SE326、339、380.....	27
SE275、279、325.....	31
SE276、280、285、287.....	31
SE323.....	33
SE235.....	34
SE392.....	35
SE237.....	35
SE227.....	36
SE47.....	39
SE119、SX161、SK08.....	39

SE119.....	39
SX161.....	40
SK08.....	40
SE09.....	41
5 その他の遺構と遺物.....	42
SX04, 114.....	42
SK05, 174.....	42
SX07.....	42
その他の遺物.....	42
IV 博多143次調査出土の動物遺存体について.....	45
V 博多143次出土銅錢.....	48
VI あわりに.....	50

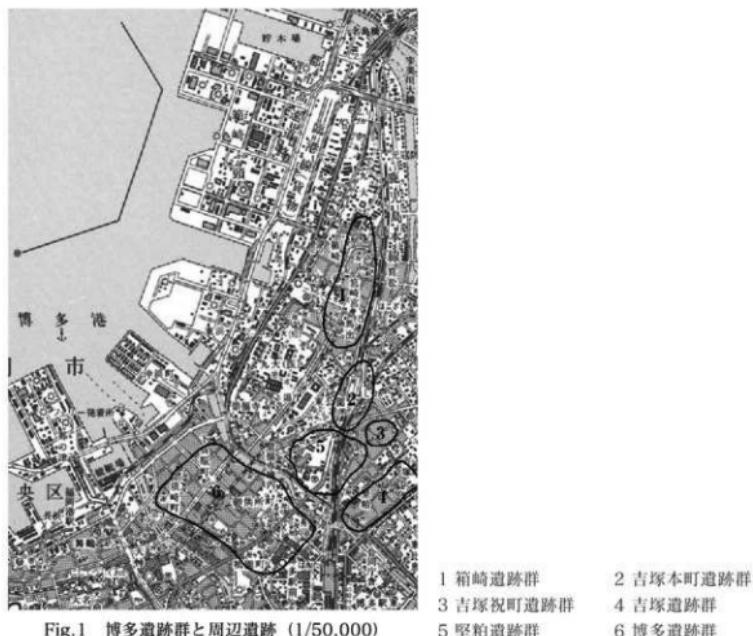


Fig.1 博多遺跡群と周辺遺跡 (1/50,000)

I はじめに

1 調査に至る経過

平成14年12月26日、有限会社 岡部商会より福岡市博多区綱場町121番における分譲マンション建設設計画に伴って「埋蔵文化財の有無について（照会）」の書類が埋蔵文化財課に提出された。これを受けて当課では書類審査を行い、周辺状況と計画図から調査が必要と判断した。その後、協議を重ね、平成15年7月22日より調査を開始した。調査は約3ヶ月を要し、同年10月21日に終了した。

2 調査の経過

調査に先行して周囲の矢板、基礎が打ち込まれ、建築工事を請け負った株式会社 イチケンによつて事前審査担当者の指示のもと調査を要する造構面まで土砂がすき取られた。次に排土運搬スペース、調査事務所、発掘機材置き場及び作業準備スペースとして、敷地中央部に全体の約1/3面積の鋼板が架けられた。しかし、この範囲は調査区の頭上に梁と鋼板が架けられた状態となり、調査の進行、作業員の安全、及び写真撮影の妨げとなつた。便宜上、この鋼板部分の南北を含めて3区に分け、南からⅠ区を数え記録に用いた。調査は南側のⅠ区より始め、排土を鋼板を隔て北側の3区に置き、溜まつた時点で、クレーンとトラックにより運搬した。

3 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

(調査主体) 福岡市教育委員会 (調査総括) 埋蔵文化財課長 (前任) 山崎純男 調査第2係長 (前任) 田中寿夫 (庶務) 文化財整備課 御手洗 清 (試掘調査・協議) 事前審査係長 (前任) 池崎謙二 担当 久住猛雄 (調査担当) 荒牧宏行 (調査作業員) 内山和子 松井一美 真田弘二 小野千佳 中野裕子 幸田信乃 球本よし子 豊丸秀仁 渋谷留雄 濱フミ子 森下初美 西野光子 知花繁代 沖政芳 松若俊美 (資料整理) 松下伊都子 小金丸昌世 金丸幸加 大石菜美子 相原聰子



Ph.1 調査区全景 (南東から)

II 位置と環境

(1) 立地

本調査地点は博多遺跡群の北部、いわゆる「息の濱」に位置する。地山の砂丘地形からみると北端の砂丘の高まり（砂丘Ⅲ）が南西方向に傾斜した縁辺部に位置している。調査区内で地山の砂丘砂層の標高は北側の2.9mから南西端の2.2mまで下がり、この南西隅に埋立土とみられる傾斜した土層が検出された。

この砂丘Ⅲは既往の調査成果によって11世紀に離水し12世紀後半以降には生活が営まれるような地域となるとともに、内陸部の砂丘（砂丘Ⅱ）との間の湿地帯も埋まっていく。ただし、現在と同じように湿地帯がほぼ完全に埋め立てられるのは17世紀初頭の近世に入ってからと考えられている。（『福岡平野の古環境と遺跡立地』1998 九州大学出版会 p-80~94）

(2) 既往の調査成果から

本調査を含む「息の濱」が博多の中心となって関連に貿易が行われるのは中世後期、特に15世紀以降である。博多の交易は日朝、日明貿易のほか琉球、ジャワ、タイ、ベトナム等の南海との交易も結び、国内においては瀬戸内海を通じた中継貿易の拠点となって発展を遂げた。これは朝鮮の粉青沙器や明の青花、ベトナム、タイの陶器、国産では備前摺鉢が堺とならび多く出土することからも首肯できる。特に本調査地点の東側に近接した第60次、42次調査の遺物にこの史実をみることができる。こうした利権を争って、大内氏と大友氏が争いを繰り広げるが、天文二十年（1551）、大内氏の滅亡で大友氏の一元支配となる。しかし、その後も肥前の龍造寺氏の筑前侵入や薩摩の島津氏による戦火のもと博多は灰燼に帰し、その後再興は天正十五年（1587）の秀吉による太閤町割を待つことになる。この町割の変化は発掘調査によっても確認され、15、16世紀半ば位までの遺構の主軸が現在の町並みから10数度東に振れているのに対し、16世紀末以降の遺構は現在と同じ方位をとり、今まで継承されていることが判明している。



Fig.2 既往調査地点と地形 (1/12,500)



Fig.3 143次調査地点 (1/1,000)

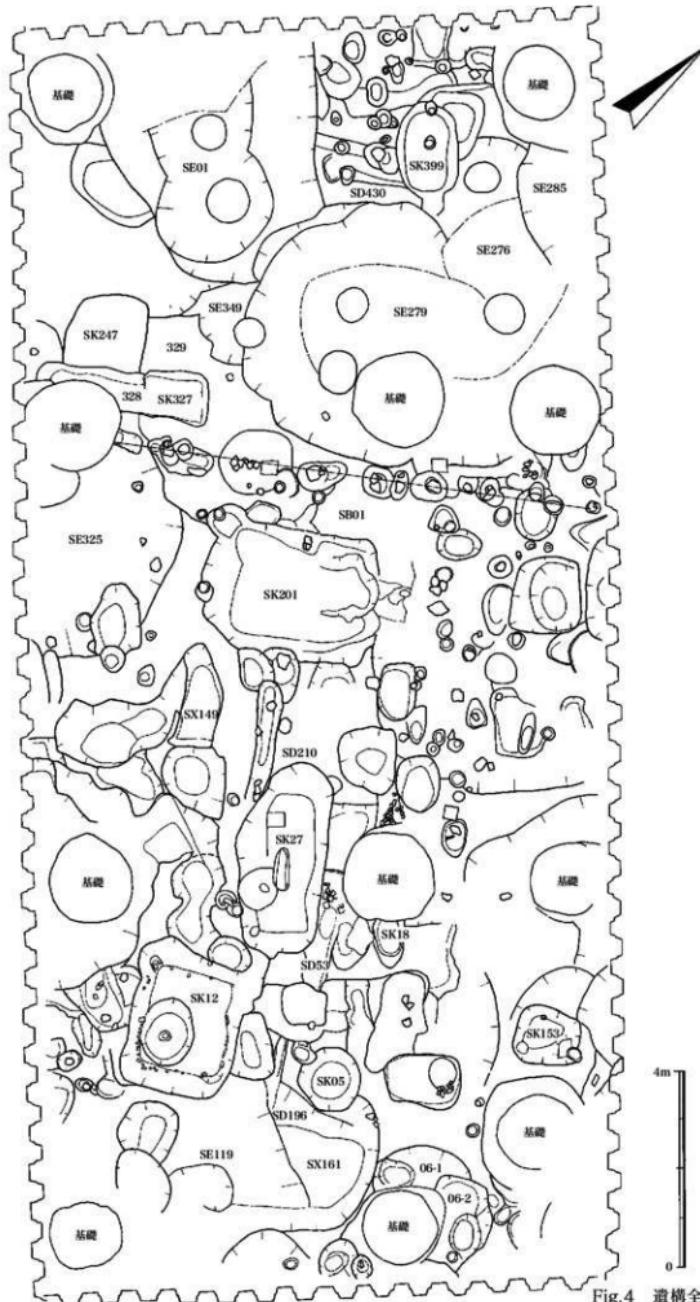


Fig.4 遺構全体図 (1/100)

III 調査の記録

I-2で先述した通り廃土処理の関係で調査区を3分割した形で南側から発掘を進めた。発掘に先行した上層のすき取りで表土下2mの標高2.9mまでが除去されていた。このレベルでは高くなつた北側で地山の砂丘砂が一部露出していた。地山の砂丘砂は南西方向へ下降していくとみられ、調査区の南西隅には埋立土と思われる土層がみられた。

検出された主な遺構は方形大型土壙3基、井戸12基、根石が並ぶ建物跡1棟が検出された。遺物時期は15~16世紀が大半を占め、李朝の象嵌青磁、陶器等目立つ。

1 土壙

SK06

調査区南東隅で検出された。その大半が基礎によって破壊されていた。当初、径約2.5mの円形土壙と認識し発掘を進めたが、下底近くで切合いと思われる落ち込みが3箇所に認められたため、枝番号を付して、遺物の取り上げを行つた。特に北側のSK06-1では上部から土師器坏、皿が多く出土した。

出土遺物

土師皿2、3は06-1の比較的上部から、1、4は06全体の掘り下げ中に出土。5、6の土師器坏は土師皿2、3と近接して出土した。7~15は06-1の下部から出土し、完形もしくはそれに近い。口径は最小の14が11.9cmで他は12.5~13.0cm大にまとまる。16、17は06-1の上部から出土。16は龍泉窯系青磁で内面見込みの圓線内に草花文が印刻されている。17は土師質の鍋で底部を欠くか2/3程が出土した。外面の全面にススが厚く付着している。

18~24は06-2から出土。19の土師器坏は完形で口径11cm、体部中位が凹み屈曲がみられる。20は灰色を呈した須恵質に近い摺鉢である。内面は摩耗しているが横ハケと摺目がわずかに残る。21は陶器で外面と内面上部に黒色に近い釉が施されている。22は白黒を配して草花を表した象嵌青磁である。23は龍泉窯系青磁。内面見込みに双魚の印文を施し、外面高台内の釉を輪状に搔き取る。24は型押しの白磁皿。25は瓦質の火鉢である。内面にハケ目が残る。25は備前摺鉢である。

06-1の下限は14世紀後半~15世紀、06-2の火鉢は16世紀まで降る可能性があり、06-3の備前摺鉢は15世紀後半位か。

SX68

SK06の東側に近接した柱穴状の小さな落ち込みから象嵌青磁瓶の破片が出土した。

出土遺物（27は巻頭図版）

27の復元した最大胴部径は18.8cmを測る。肩部は水滴状の白黒外郭線内に磨手状の白点を充たしている。以下、外郭線に白土を嵌め込み、中を脈状に黒色象嵌した唐草文を施す。肩部破片の内面に垂下した釉がみられる。類品に15世紀代と考えられている長崎県神御靈神社伝来の粉青象嵌唐草文瓶がある。

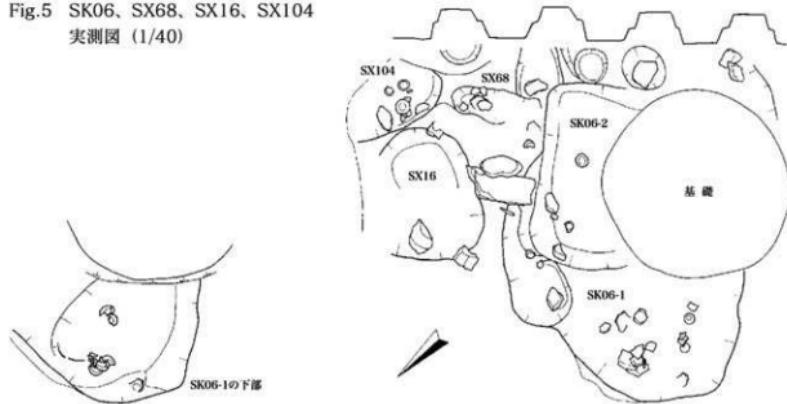
SX16

SK06の東側に近接した70×120cm程度の土壙である。出土遺物の28は白線2条が象嵌された粉青沙器。29の青磁は釉が火熱を受け、胎土と外面の付内に露胎部分は赤色を呈す。

SX104

SK06の東側、調査区の南東隅で検出された。擾乱により全体の形状は不明である。出土遺物の30~33の土師器坏皿の中、32と33は完形である。34は青磁で内面に花弁を浮文にして重ねた花文が施されている。35は巴文の瓦当で、巴の外側に圓線が巡る。

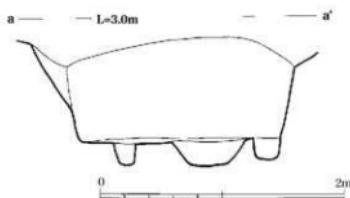
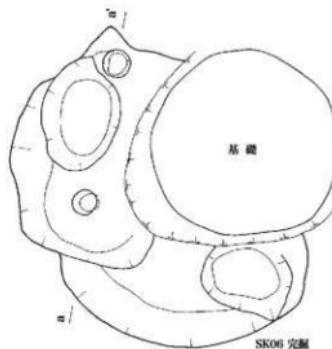
Fig.5 SK06、SX68、SX16、SX104
実測図 (1/40)

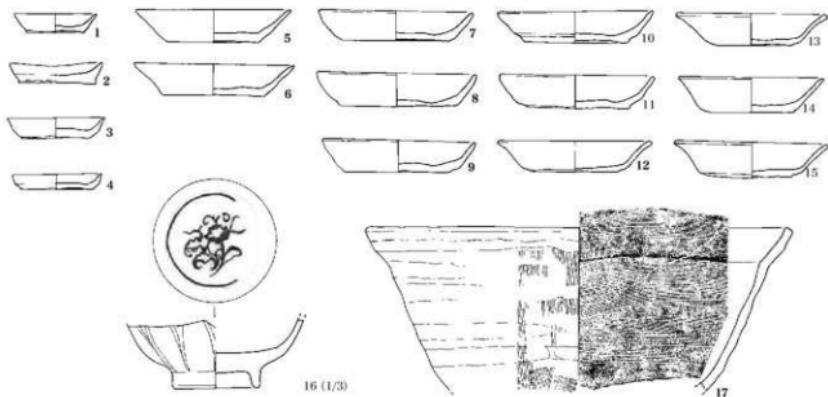


Ph.2 SK06-1 上部遺物出土状況 (西から)

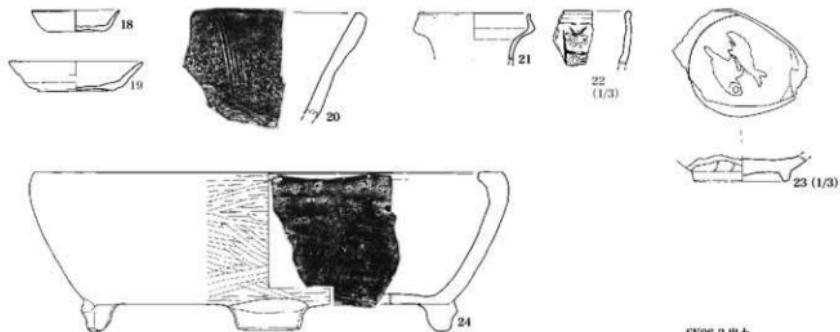


Ph.3 SK06-1 下部遺物出土状況 (南から)

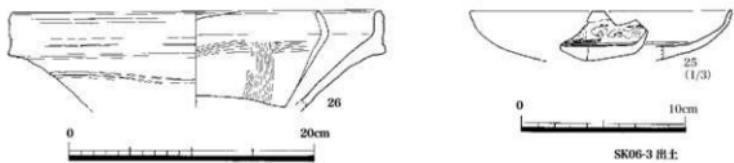




SK06-1 出土



SK06-2 出土



SK06-3 出土

Fig.6 SK06出土遺物実測図 (1/3、1/4)

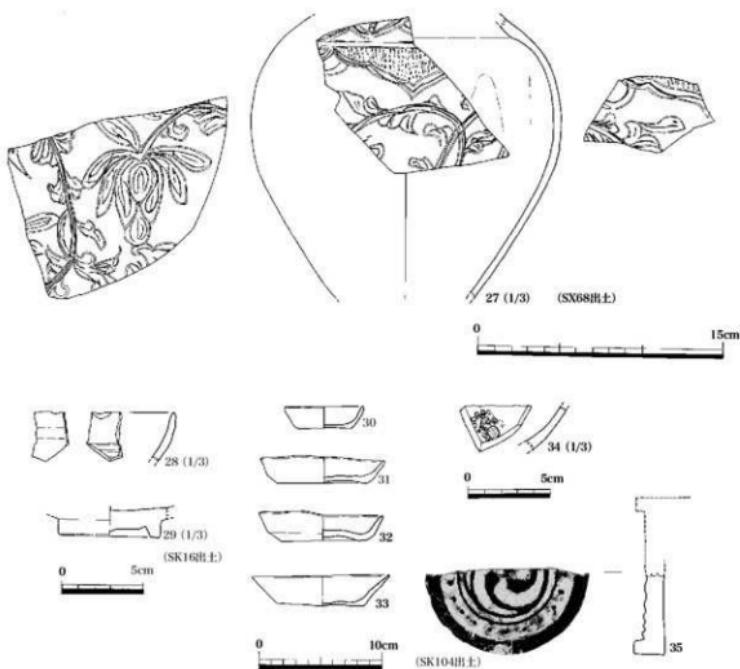
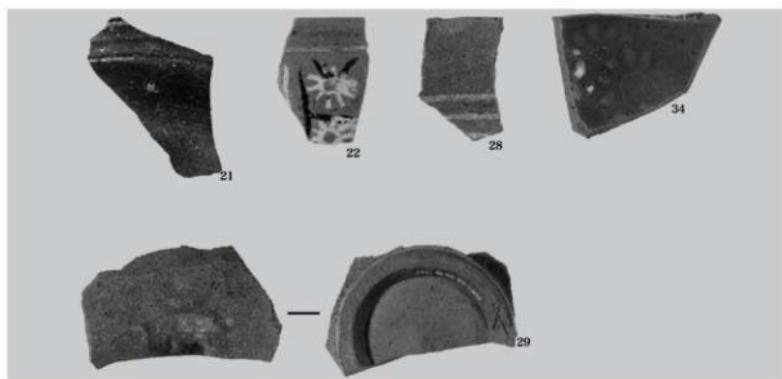


Fig.7 SX68、SX16、SX104 出土遺物実測図 (1/3、1/4)



Ph.4 SK06出土遺物

SK18

調査区南東部（1区）のほぼ中央部で調査区直交したSD15に切られた土壌である。長軸長170cm、短軸長は約70cmの長方形プランを呈す。深さ約70cmが残り、北辺近くの底面より約50cm浮いた高い位置から土師皿が、中央の底面から10~15cm浮いた位置から土師器壺や皿が出土した。木棺墓の可能性が高いが、木質は検出されなかった。出土遺物

36~44の土師皿は完形もしくは近いものである。口径7.3~8.2cmにまとまる。37、44の口縁部にススが付着し灯明皿としての使用が考えられる。45~49の土師器壺の中、下部から出土した46、47が完形に近い。50は瓦質の火鉢、51は須恵質の摺鉢である。遺存する部位の上部に3本の摺目がある。

50の火鉢以外は15世紀代でおさまるものか。



Ph.5 SK18 完掘状況（東から）

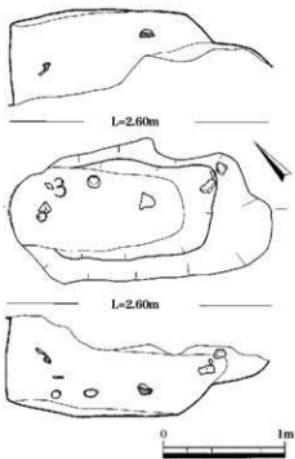


Fig.8 SK18 実測図（1/40）



Ph.6 遺物出土状況（南から）

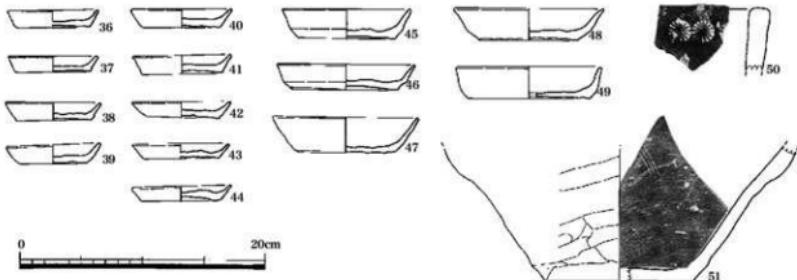


Fig.9 SK18 出土遺物実測図（1/4）

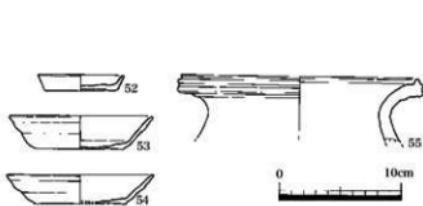


Fig.10 SK19 出土遺物実測図 (1/4)

SK19

調査区の南東隅で検出された。当初、径約2mの楕円形土壙として発掘したが、下部に2段掘状に略方形の土壤が検出されたため、これをSK19として記録した。120×130cmの方形プランで、深さ50cmが残る。出土遺物の52、54は口縁部にススが付着している。53は下部から出土し、完形に近い。55の陶器甕は緑褐色の施釉がされるが、外面の済曲した口縁部には掛かっていない。

SK12

SD14に切られる。上端のプランは $2.4 \times 2.9m$ の方形を呈し、主軸方位はN-35°-Wをさす。深さ90cmが遺存し、壁体は傾斜をもち下端が $1.7 \times 2.05m$ の方形になる。壁体および、下底は酸化鉄が沈着し硬化した黄褐色粘土が付着し、下底の隅角に径約10cmの杭跡と周縁に連続した径約5cmの杭跡とみられる小穴が検出された。壁体を擁護した施設を杭列で固定したものとみられ、壁体背後に粘土が生成した可能性がある。

出土遺物

56から59は下底から出土したほぼ完形の土師皿である。口径7.0~7.6cmを測る。60、61も下底で重なって出土した土師坏である。口径11.6cmを測り、61の口唇部にはススが付着している。62の陶器は淡いオリーブ色を呈し、内面の口縁下が張り出し段を有す。63は象嵌青磁である。水平近くに張り出した口縁端部は輪花に成形している。頭部には縦位の突帯が貼付き、型押しによると思われる連続した珠文を装飾している。この突帯を境に白線2本の中に黒線を入れた方形の区画を配し、中に白線を外郭にして内に黒線を入れた花弁と白黒の破点状の文様が一部みられる。内面は口縁端部近くを輪花状に沿わせて凹ませ、内側に白土を用いて平行線と草花のような文様を象嵌している。64の青磁皿には墨書が描かれているが判読不明。65は青磁で、張り出した口縁に唐草文が片彫りされている。66は青磁大挽、67、68は染付である。69の備前摺鉢は最下底から出土し、完形に近く復元できた。口縁端部は丸く取め、内面の8箇所に6本単位の摺目が施されている。70は土鍤。遺物の時期は15世紀後半代を下限にできると思われる。

SK19

SK12の北西隅で検出された張り出してある。土壤が切合っているものと考えられる。出土遺物の71、72は口径13cm前後の土師器坏で、72はほぼ完形。

SK255

SK12の南東隅で検出された落ち込みであるが、SK12に含まれる可能性がある。出土遺物73の備前摺鉢はSK12出土69の口縁部と近似している。

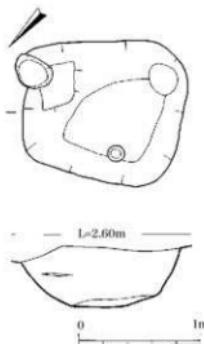


Fig.11 SK19 実測図 (1/40)

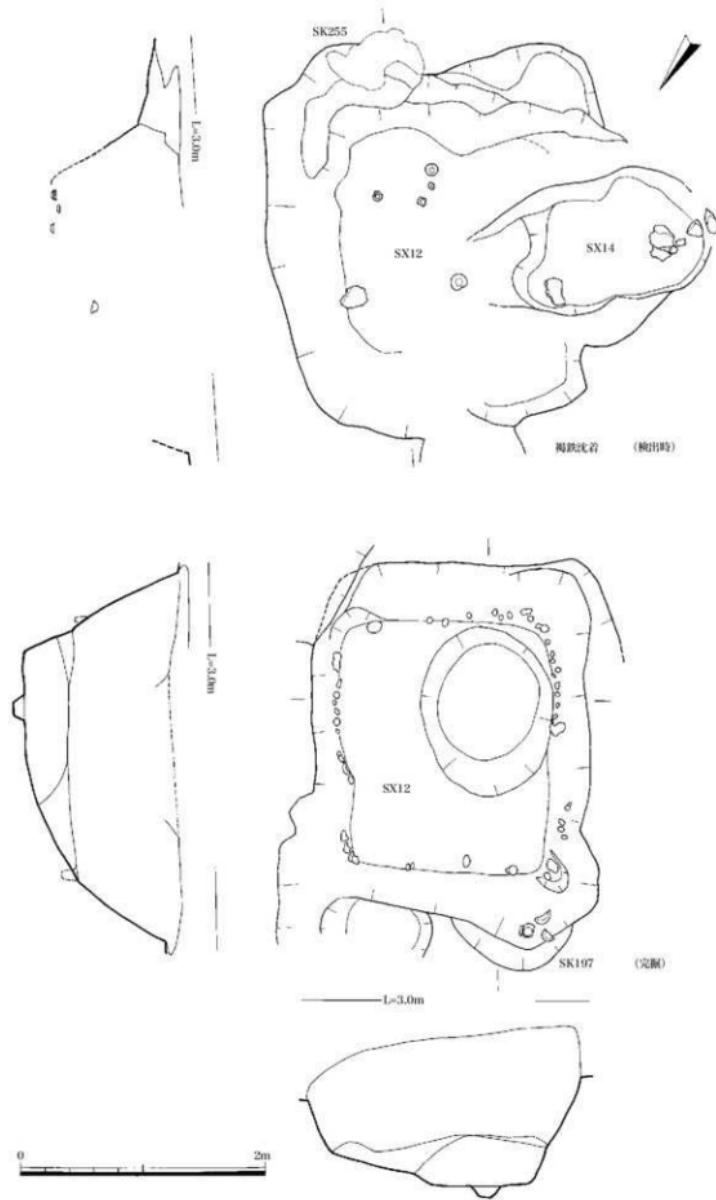


Fig.12 SK12 実測図 (1/40)

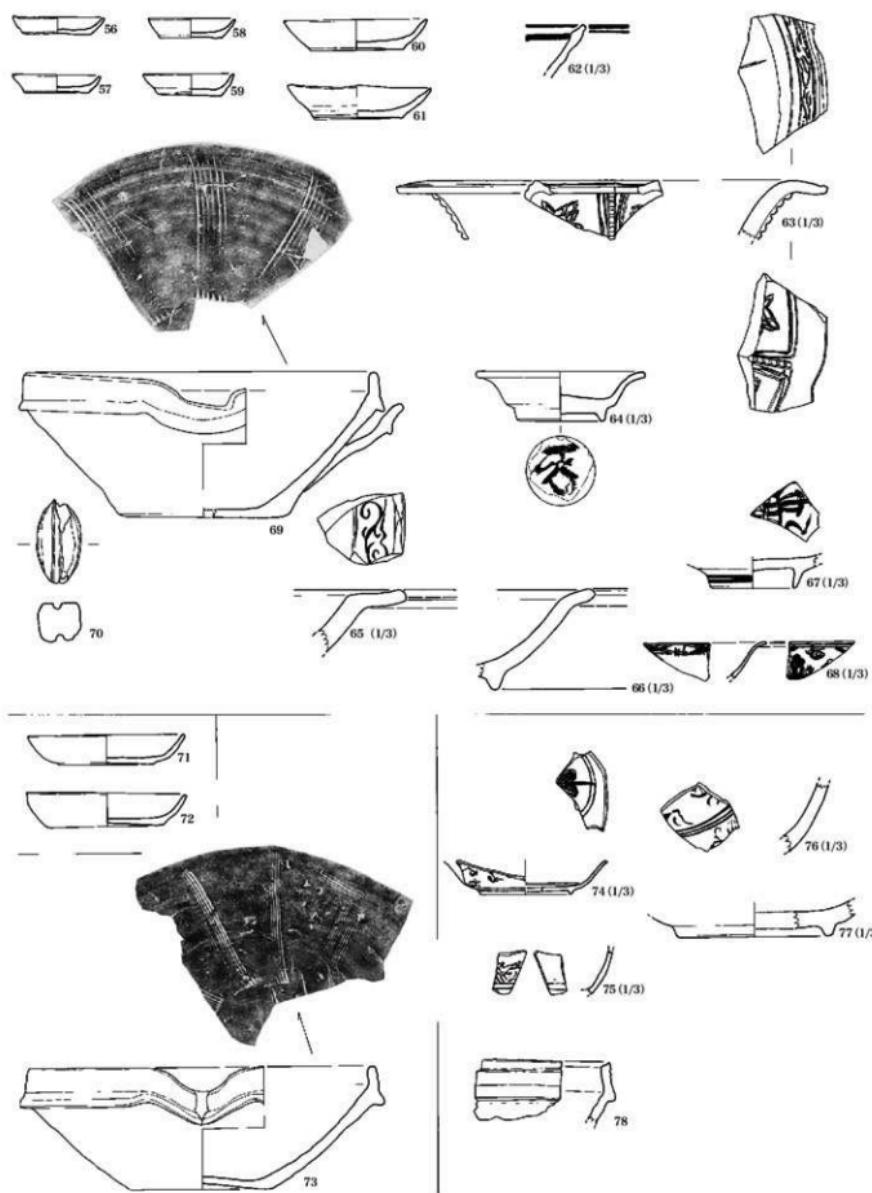


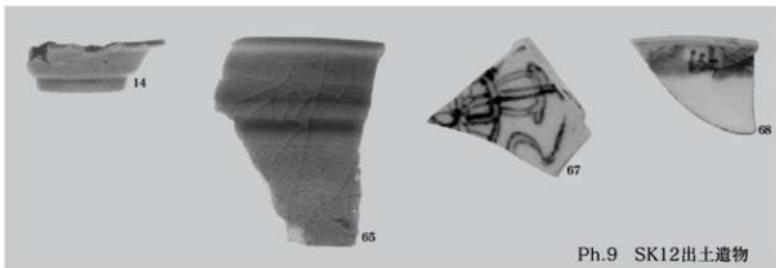
Fig.13 SK12、SK197、SK255、SX14 出土遺物実測図 (1/3、1/4)



Ph.7 SK12検出状況（北西から）



Ph.8 SK12完掘状況（北西から）



Ph.9 SK12出土遺物

SX14

SK12を切る楕円形状の落ち込みである。深さ10cm程度で浅く、埋土に焼土や炭を含む。SD15の延長とも考えられる。出土遺物の74、75は染付、76、77は青磁である。76は外面に片彫りで施文されている。77の高台内は施釉されず、赤色を呈す。78の備前摺鉢は口縁端部が面をなし、SK12出土の69より後出と思われる。

SK27

調査区南よりの中央部で検出された。遺構の半分が先述の鉄板を敷いた作業台の下になり、写真撮影が困難となった。主軸長392cm、幅170cmを測る。南端は方形をなすが、北端は湾曲している。主軸方位は現在の街区より約7°西に振れたN-46°Wをさす。下端の内法は長軸長290cm、幅120cmを測り、長方形プランを呈す。深さは85cmを測るが、図示した5、6層は漸移層ともみれる。基底面のほぼ中央で幅30cm、長さ90cm、深さ20cmの細長い落ち込みを検出したが、その機能は不明。

出土遺物

79~84の土師皿は完形は無く、約1/2の遺存である。79、83の口径が最も小さく6.8cmを測る。85は土師器壺、86は瓦器。87は白磁小片。88、89は青磁。90は染付。91はベトナム産陶器とみられる。内面に白色、外面に黒褐

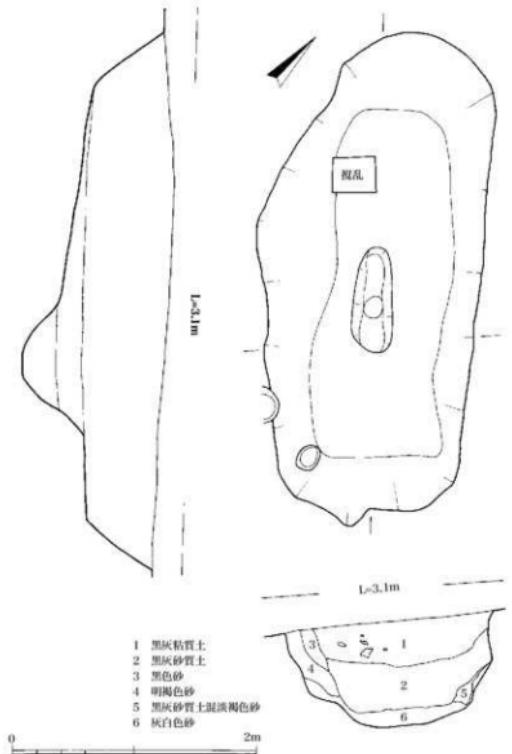


Fig.14 SK27 実測図 (1/40)



Ph.10 SK27土層断面 (南東から)



Ph.11 SK27完掘状況 (南から)

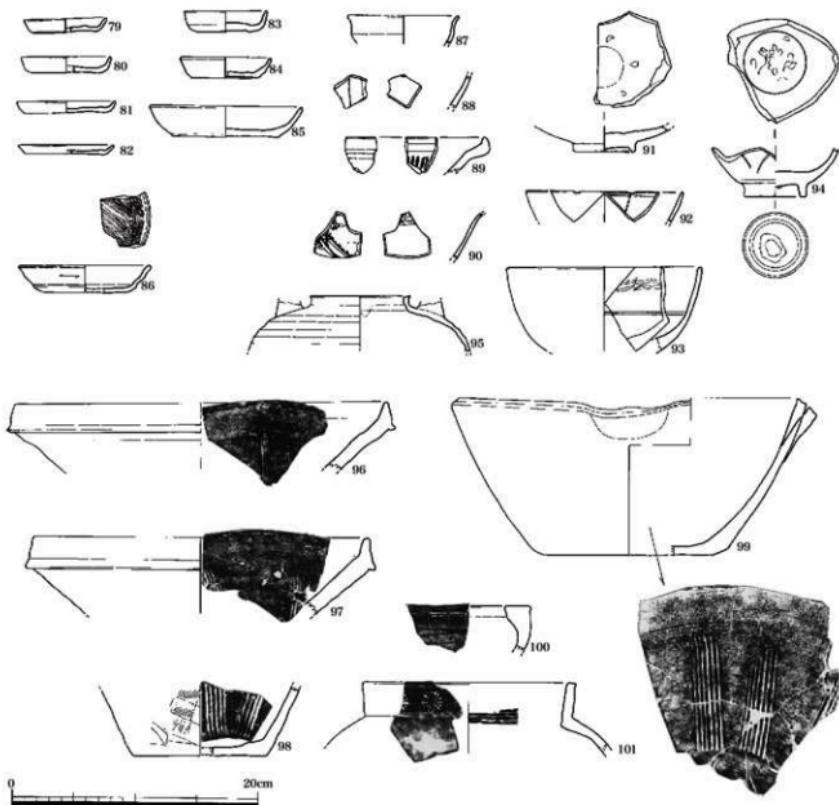


Fig.15 SK27 出土遺物実測図 (1/4)

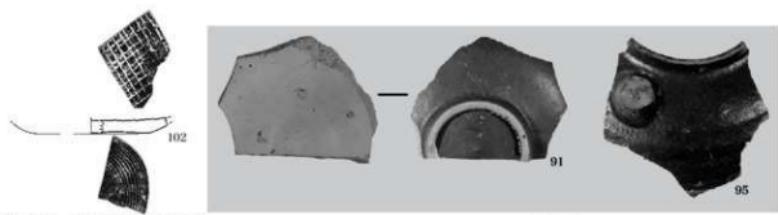


Fig.16 SP228 (SK27内)
出土遺物 (1/4)

Ph.12 SK27出土遺物

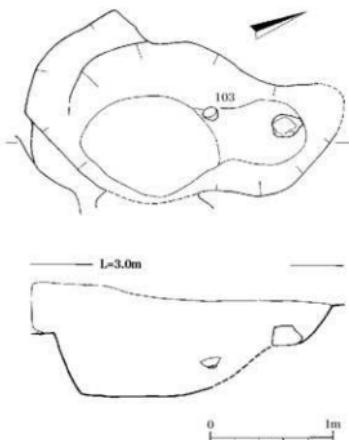


Fig.17 SK153 実測図 (1/40)

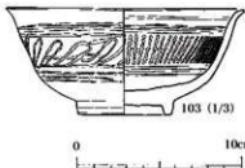
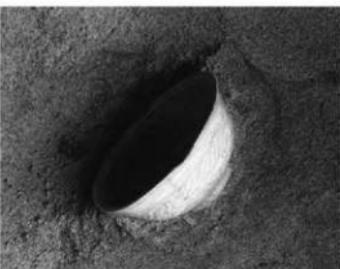


Fig.18 SK153 出土遺物実測図 (1/3)



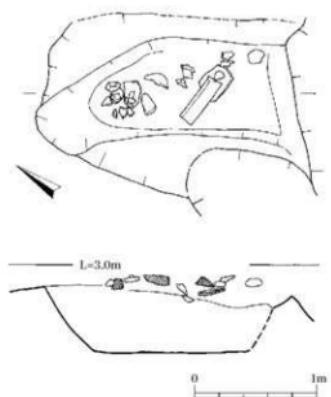
Ph.13 SK153遺物出土状況 (西から)

色の釉が施され、豊付は露胎である。内面見込みに目跡が残る。92～94は青磁である。92の内面には輪花から白帯が延びる。93は内面口縁部近くに2条の横線のような文様が施されている。94の内面見込みに草花が印文されている。外面の高台内一部を除き施釉され、目跡と粘土の付着が残る。95は陶器耳壺で、外面と内面口縁部が施釉され、口縁端部は削り取られている。釉色は黒褐色で胎土と内面の露胎部分は赤褐色を呈す。産地は未詳。96、97の陶器摺鉢は釉が剥落し、灰色を呈している。98の遺存部分は無釉である。99は無釉で、黄灰色を呈している。100、瓦質火鉢、101の湯釜は外面に黄灰色の薄い釉がみられる。遺物時期は瓦質土器等から16世紀代に入るものと思われる。

102はSK27内で検出された柱穴状の落ち込みから出土した須恵質のおろし皿である。

SK153

調査区中央部の西壁近くで検出された。形状から2つの土壙が切合っていたものと考えられる。東側の土壙153の底部近くから象嵌青磁碗（103）の完形品1点が表向きに傾いた状態で出土した。これ以外の出土遺物は極めて少なく小片である。103は口径14.6cm、器高6.6cmを測る。施釉は総て白土の象嵌による。外面体部には上下各3条の横線で挟まれた中に右上がりの波状（花弁状）の施文をしている。内面も外面同様に横線による文様帶を画し、その中に右に傾いた繩籠文を施す。釉は高台豊付も含め全面に施され、豊付には全周に砂目が付着している。また、内面見込みには1～2mm大の赤褐色粘土粒が散在しているが釉を破って付着している。



Ph.14 SX149遺物出土狀況

Fig.19 SX149 実測図 (1/40)

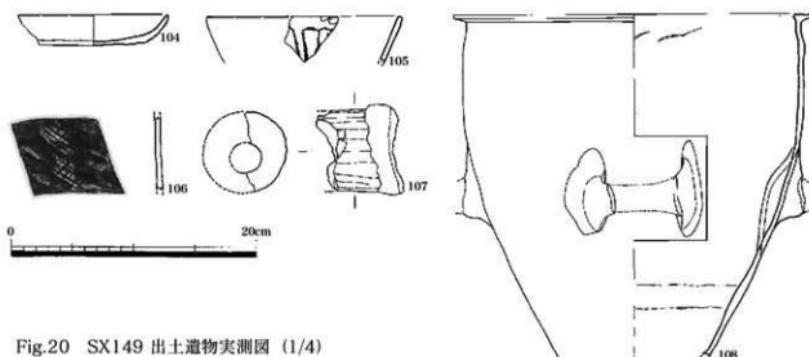
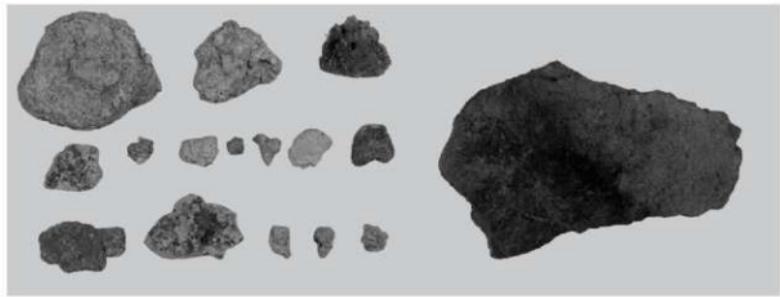


Fig.20 SX149 出土遺物実測図 (1/4)



SX149出土 鉄滓、台石

SX149

調査区の中央部で検出された。先述の銅板が上部に設置されているため上部からの写真撮影は困難であった。幅90cm、延長210cm、深さ約50cmの溝状の落ち込みに焼けた台石、鉄滓、土器等が混在していた。鍛冶関連施設の廃棄土壤とみられる。

出土遺物

104の土師器壺は口径12.2cmを測る。105は青磁碗、106は常滑、107は羽口片である。108は朝鮮産の陶器と思われる。口縁部は水平に折れ、上面に長径3.2cm、短径は口縁幅一杯の梢円形輪状となつた粘土の目跡が2.5~5cmの間をおいて付けられている。内面の口縁部近くには弧状の当具痕が残る。器壁は約6mm程度と薄い。遺存する体部中位に耳が1箇所付くが、総個数は不明。内外面に褐色の釉が施されているが、内面は拭き取られ薄くなりざらざらしている。その他、鍛冶滓、敲打痕のある方形の台石等が出土した。

SK201

調査区の中央部で検出された。上端で短軸250cm、長軸長約350cmの長方形プランを呈し、深さ約50cmを測る。主軸方位はSK12とはほぼ同じのN-35°-Wである。東壁は褐鉄が固く貼付き不整形となっている。底面から浮いた状態であるが、五輪石等の石や土器が出土した。

出土遺物

109~111の土師皿の中、109、111は口縁部にススが付着し灯明皿として使用されている。110、111は完形に近く、東壁際から出土した。112、113の土師器壺も東壁際から出土した。114は染付、115の白磁は高台を4箇所弧状に抉り取る。116の白磁は口縁端部を花弁状に抉り、内面の口縁部と見込みに凹んだ圓線を施す。釉色は黄色みを帯び、外面高台の豊付と内側は露胎で淡赤褐色を呈す。釉にはピンホールが多く、外底部は垂下した釉の凹凸がみられる。117の白磁は外面体部の中位までが施釉され、内面の見込みは輪状に釉を搔き取る。破面の一部が研磨されている。118の染付は口ハゲで口縁端部は褐色を呈す。高台の下位から豊付も露胎となり、淡赤褐色を呈す。119の粉青沙器は外面に白土で手を施し、内面は無釉である。121、122は備前摺鉢で、120の体部に鉄器が付着している。123は李朝陶器か。内外面に施釉され、体部外面に横位の平行タタキ痕、内面に弧状の当具痕が浅く残る。釉色は緑がかかった暗灰色を呈す。122は瓦質の鉢、123は土鍋である。124、125は瓦質の火鉢、126の瓦質鉢には雷文の中に十字が入ったスタンプ文が施されている。127の内外面焼されているが、胎土は赤褐色を呈し土師質に近い軟質である。128は瓦質の湯釜で斜位の平行線を組み合わせたスタンプ文を施す。遺物時期の下限は瓦質土器等から16世紀代まで降るものと考えられる。

129の瓦はSK201の北西隅で切合った土壤から出土した。外面に網目タタキ文が残る。130の同安窯系青磁皿はSK201の西壁が西側に張り出し褐鉄が固まった位置から出土した。SK201とは別の遺構の可能性もあり、区別した遺構番号で登録した。外面高台内に墨書があり、遺存部位が少ないが1字は「綱」か。

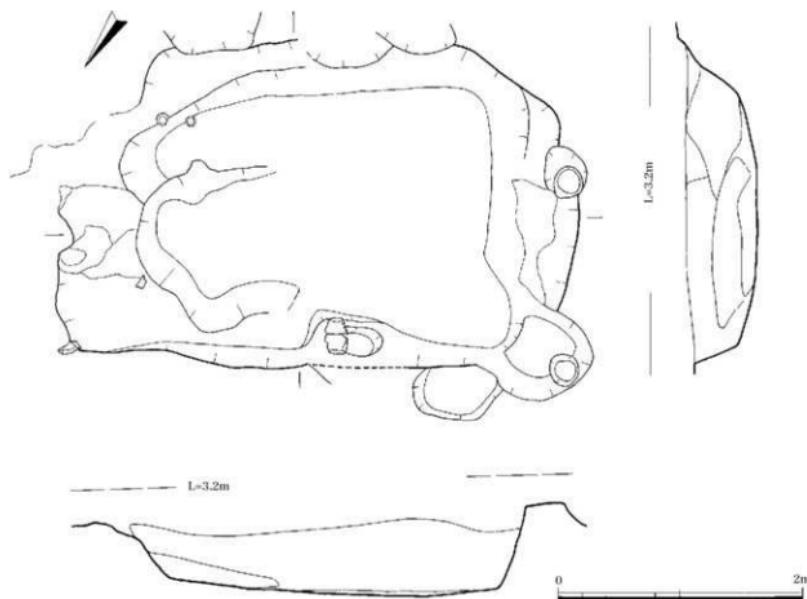


Fig.21 SK201 実測図 (1/40)



SK201 出土五輪石

Ph.15 SK201 完掘状況
(北東から)

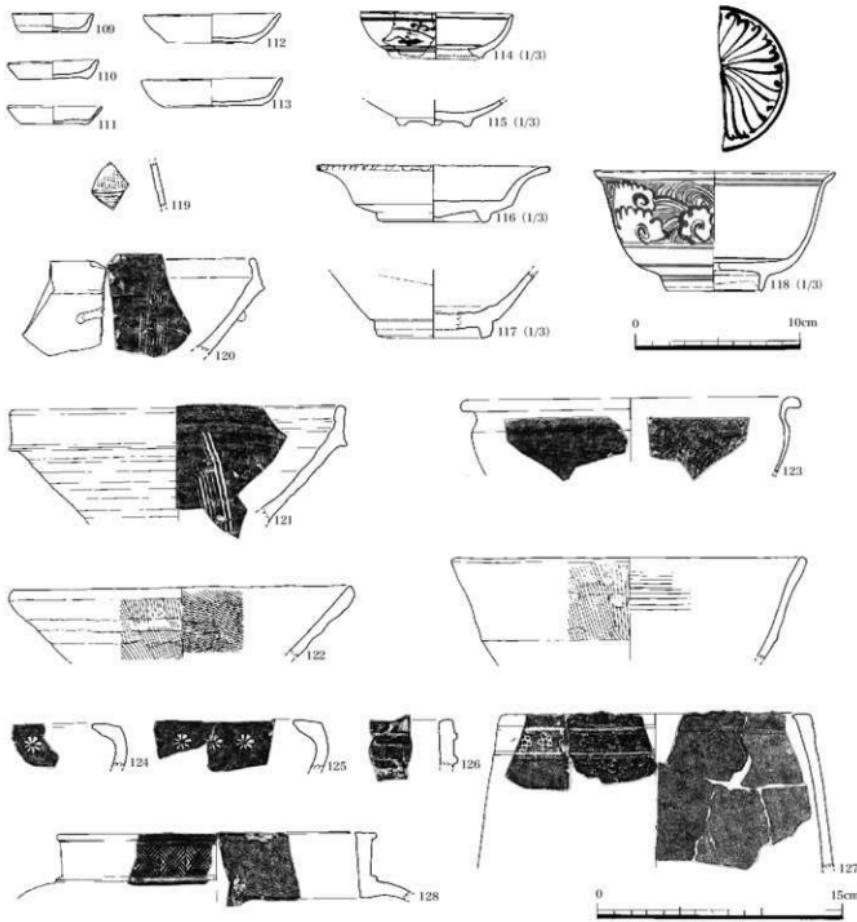


Fig.22 SK201 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



Ph.16 SK201出土遺物

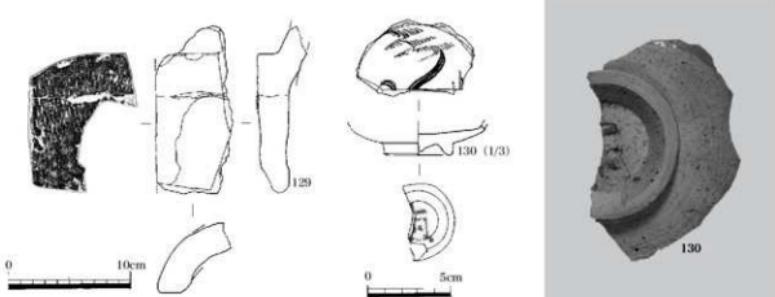


Fig.23 SK201周辺出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

Ph.17 SK201出土墨書き土器

SK327, 328, 329

調査区の北西部で検出された。SK247と直交する方向で切合い、その関係は不明確ながらSK247を切っていると判断した。東側が幅広くなり別の遺構が切合っている可能性もあり、遺構番号を東から327、328と区別した。SK327の幅は約100cm、SK328の幅は約80cmを測る。埋土は砂と青灰色シルトの互層となり、流水していたものと考えられる。遺物はSK327の方に集中して出土した。

出土遺物

131は口径12.6cmの土師器
坪。132は粉青沙器で外面体部

と内面に白土を刷毛で塗りつめている。高台内まで掛けられるが、置付は拭き取られ砂目が付く。133土師質の羽釜である。134は朝鮮陶器とみられる。上げ底の破片と湾曲した体部が出土し、別個体であるが135と同形と思われる。内外面に施釉され、緑色の強い灰色を呈す。135は片口の朝鮮陶器である。内外面全体に褐色の釉が施されている。外面体部に平行タタキ、内面に浅い弧状の当具痕と輪積みの縦目が残る。口縁部上面には粘土の目跡が残る。

136はSK328から出土した口径14.3cmを測る土師器坪。137、138は上部のシルト層から出土した。137は龍泉窯系青磁、138は紺青色の染付。

139、140はSK327の北側に近接した落ち込みから出土した。139は李朝の白磁か。見込みと高台

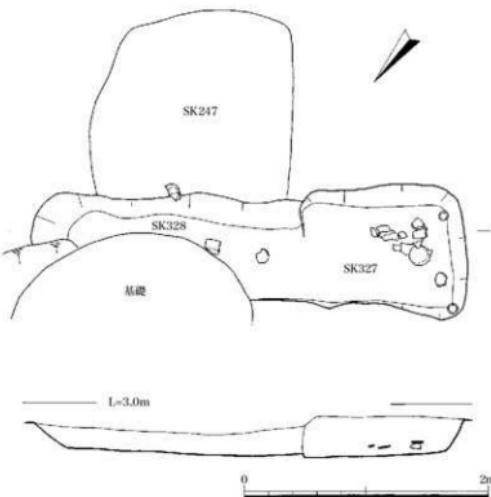


Fig.24 SK327, 328, 329実測図 (1/40)

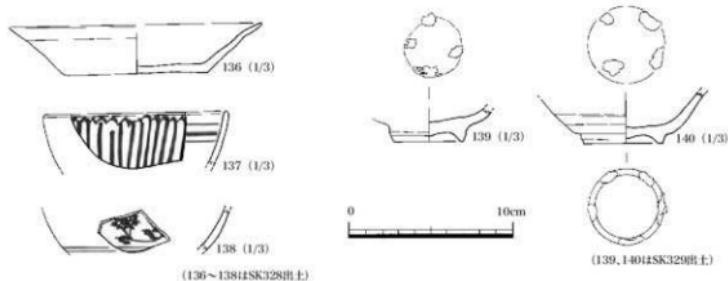
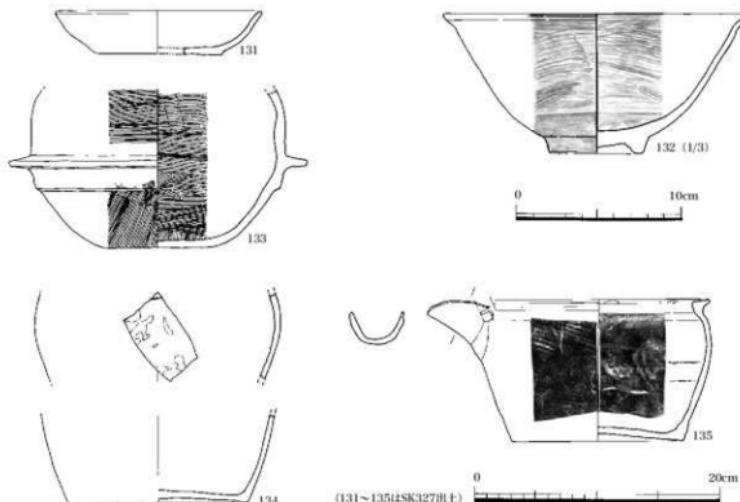
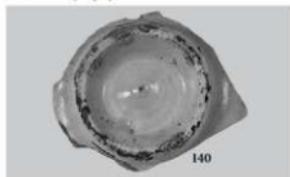


Fig.25 SK327,328,329 出土遺物実測図 (1/3,1/4)

豊付に砂目が付く。釉は不透明な白濁した色調で、豊付も含め全面に施釉されている。140も李朝の陶器碗である。釉色は緑がかった青灰色で豊付以外の全面に施釉されている。豊付と内面見込みには砂目が付く。

出土遺物からみたSK327、328の時期は15世紀後半から16世紀にかけての時期と考えられる。



ph.18 SK327 周辺出土遺物

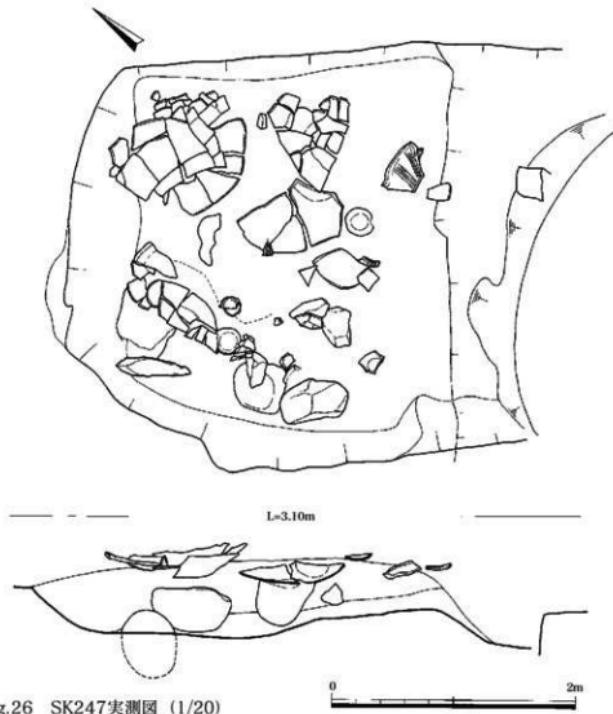


Fig.26 SK247実測図 (1/20)

SK247

前項のSK328と切合って検出された。検出時において遺物が集中して出土していた。1辺が170cmの方形プランを呈す。南側は基礎とSK328に切られていため不明。深さ約30cmが残る。遺物は北側に多く、特に朝鮮陶器甕158の破片がまとまって出土した。口縁部は下部から出土し、約3/4周まわっていた。遺物に混じって、下部からは20cm大の礫や骨片が出土した。

出土遺物

土師皿141～146は口径6.4～7.0cmにまとまる。土師器甕147～150は口径11.2cm～11.6cmで151はやや大きく口径12.4cmを測る。この中149はほぼ完形である。153は染付皿はほぼ完形である。

内面に玉取獅子、外面体部に牡丹唐草文を描いている。154は瓦質土器で外面銀化している。155は



Ph.19 SK247遺物出土状況 (南東から)

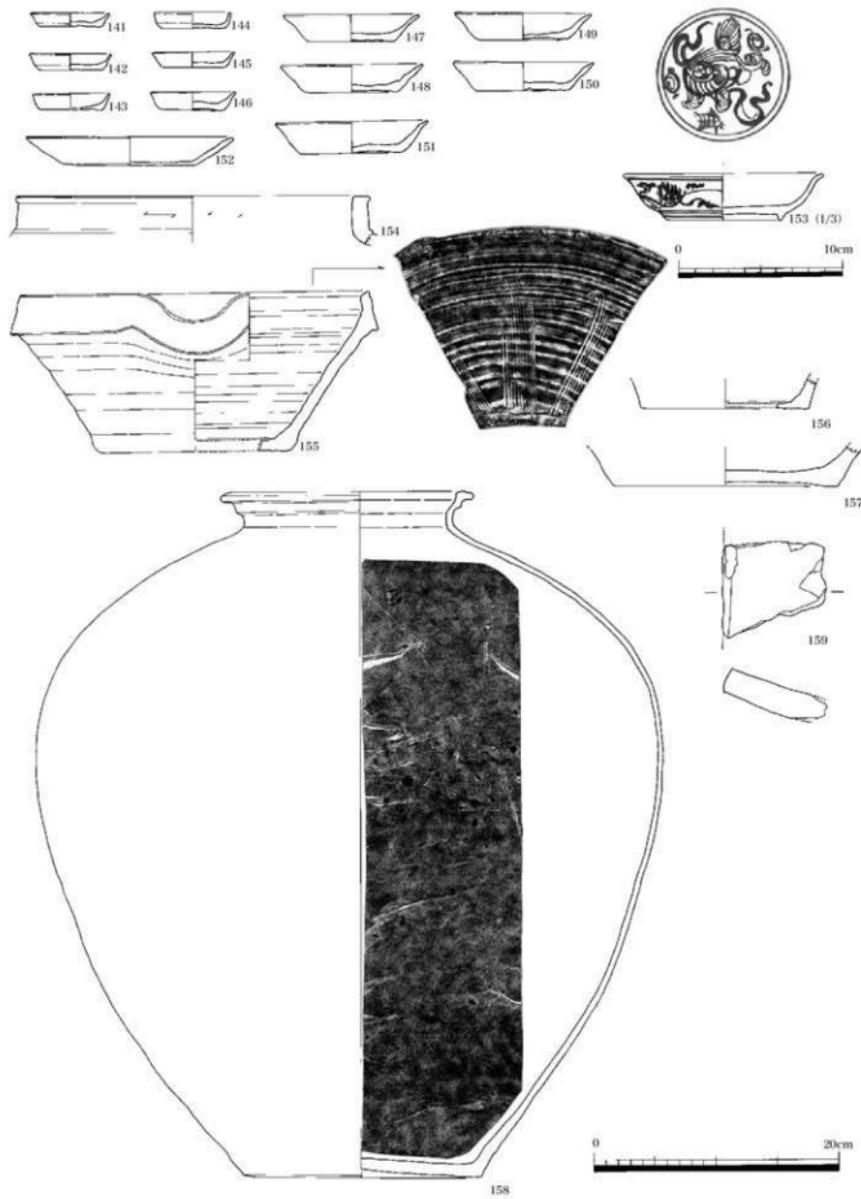


Fig.27 SK247 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

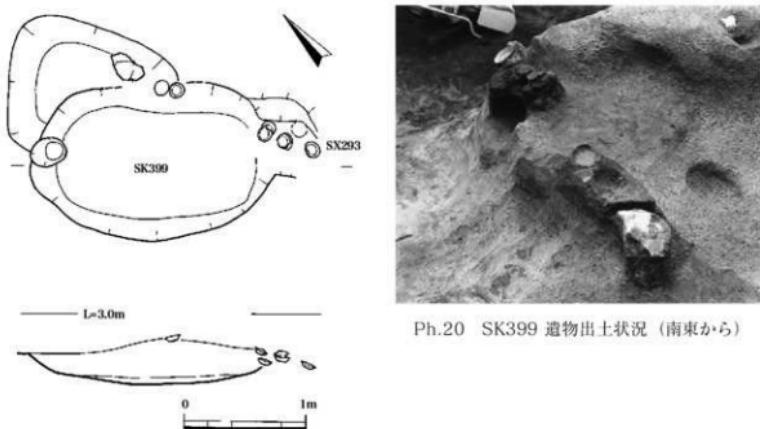


Fig.28 SX293,SK399 実測図 (1/4)

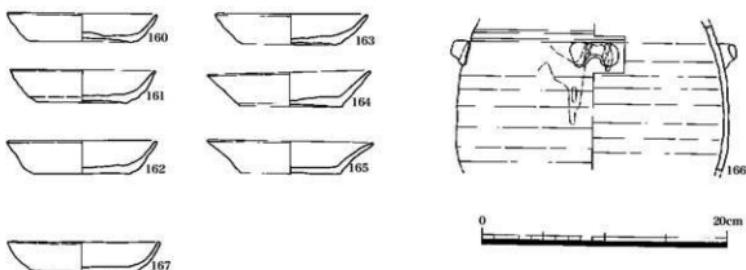


Fig.29 SX293,SK399 出土遺物実測図

備前摺鉢、156の陶器は外面に緑灰色の釉が施され、内面は拭き取られている。157の陶器は外面無釉で褐色を呈し、内面は釉が拭き取られている。158の陶器甕は朝鮮産とみられる。全体の2/3が遺存し、器形全体が復元できる。内外面に緑灰色の釉が施され、器壁が薄く体部は約6mmである。159の平瓦片は器面が剥落し、調整不明。

SK399, SX293

調査区北壁近くで検出された。主軸方位は現在の区画に近いN-41°-Wを示し、短軸長125cm、長軸長190cmの隅丸方形に近いプランを呈す。深さは40cmを測る。南東側に土師器壺が5個体集中して出土し、SX293の遺構番号を付したがSK399との関連は不明。また、東辺際からも土師器壺が2個体出土。出土遺物の160～164の土師器壺はSX293からの出土である。160～163は口径12cm前後であるが、164と下部から出土した165は口径13.4cmを測る。特に165は全体が灰黒色を呈した瓦質に近い壺で体部が外反している。166は朝鮮の耳付壺である。内外面に緑がかった灰色の釉が施され、外面に垂下した部分がみられる。器面には1～2mm大の砂粒が多く浮き出ている。167は口径12.3cmを測り、器形ともにSX293出土の壺と類似する。

2 挖立柱建物跡

SB01

調査区の中央部を横断するようにして根石を設けた柱穴が整然と配列していた。柱筋の方向はN-53° - Eを示しSK201等の土壤と同方向である。建て替えが認められるが、調査区内での桁行方向の柱列延長は9.9mを検出し、梁行は4.02mを確認した。柱穴はSP1、5、8、11までが組み合うとみられ。

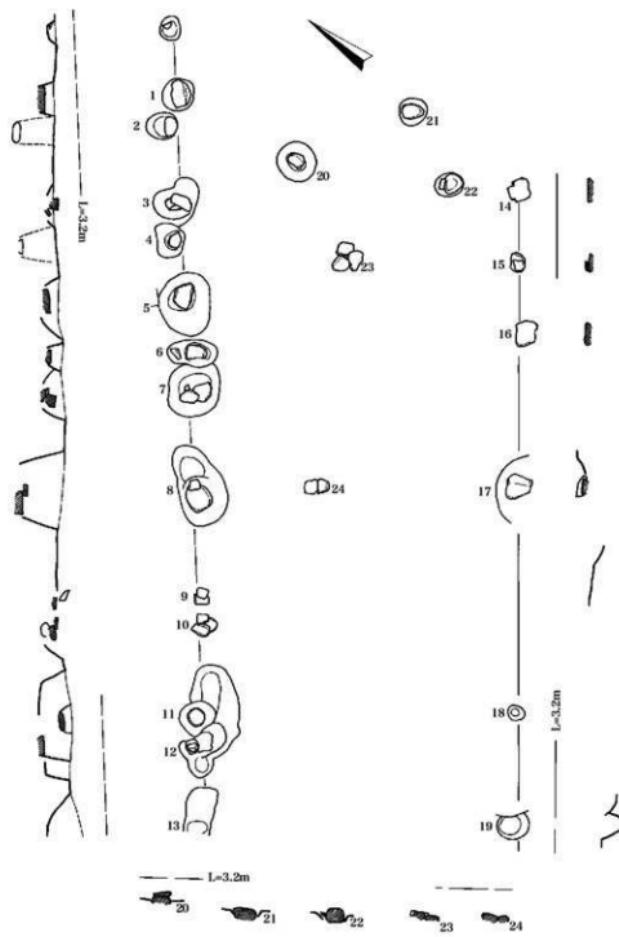


Fig.30 SB01 実測図 (1/60)



柱間は2.5mを測る。SP3、7、9、10、12は複数の石材で根石とし柱間2.2mを測るが、東西の延長は判然としない。SP2、4、6は前者に付属するものか、または補修的なものである可能性があり、從って3回程度の建て替えが推定される。

3 溝

調査区北側でSK399や柱穴の下部から東西方向のSD430（幅80cm）、中央部で南北方向にSD210（幅40cm）、SD53（50cm）、SD196（幅25cm）が検出された。これらの溝は断続的に残っているが、前項の土壤と同方向に掘削されている。

SD15

調査区南側で上面の遺構として検出した。暗灰色粘質土の埋土で周辺の他の遺構を切って、幅120cm、深さ20cmの規模で東西方向に掘削されていた。西側では不明瞭となつたが、SK12を切っていたSX14がその延長である可能性がある。

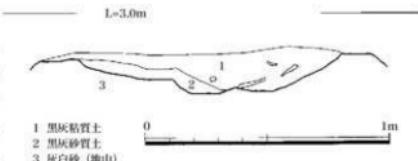


Fig.31 SD15 土層断面 (1/20)

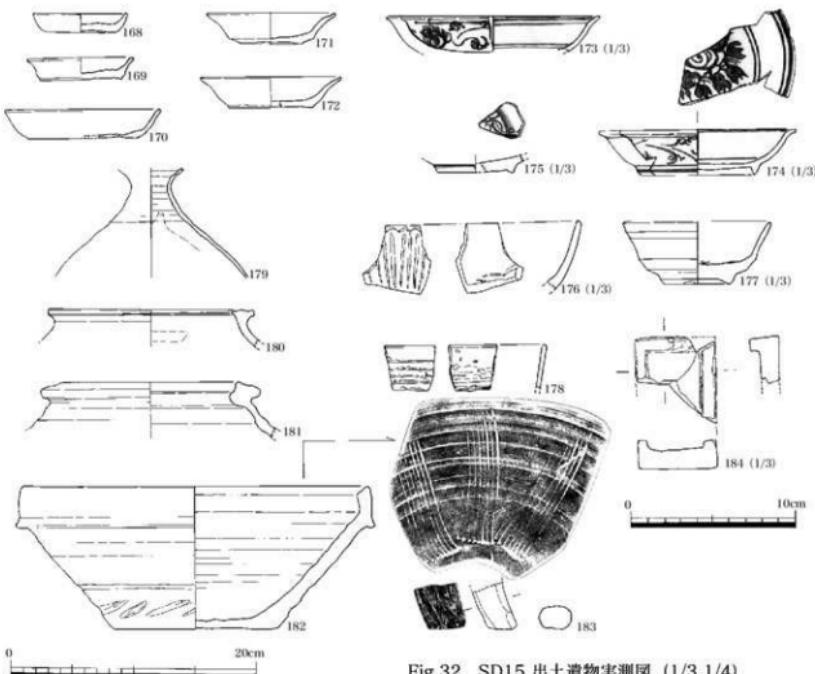


Fig.32 SD15 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



Ph.21 SD15検出（調査区南側上面遺構、南から）

出土遺物

168、169は土師皿、170～172は土師器坏、173、174は明染、175は青白磁、176は青磁椀、177は李朝の白磁で見込みと高台に砂目跡が残る。178は白泥を横方向に刷毛塗りした粉青沙器である。179は李朝の徳利形の陶器で内外面に縁がかった褐釉が施されている。180、181は褐釉陶器、182の陶器摺鉢は肥厚した外面口縁部のみ施釉され、他は露胎で、淡赤褐色を呈す。183は土師質の脚部若しくは取手と思われる。硬質で細い棒状のもので削られ成形されている。184は素焼きの硯で、泥質の良質な粘土を用い硬質である。黄灰色を呈す。遺物の下限は16世紀後半代におけると思われる。

4 井戸

井戸は調査区北側に集中し、総じて12基が検出された。井筒、井戸枠の木質の検出は無く、標高0.7mで湧水し、発掘を止めた。

SE01

調査区北際で検出された。検出時には方形の掘方を確認していたが、下部で井筒の痕跡を2基検出した。これらの井筒を北側よりSE01-1、SE01-2とした。SE01-1は径70cm、SE01-2は上面より検出され、径90cmを測る。深さは検出面より2.3m下げた標高0.7mで水が湧き出し、以下約20cm程掘り下げる發掘を断念した。

出土遺物

コンテナ約3箱分出土した。内訳は土師器坏、皿類の破片が6割方を占める外、輸入陶磁器類、土師器、瓦器、陶器の雑器が出土した。185～195の土師皿は190、195を除き口径7～7.5cmにまとまる。185、189、191、194の口縁部には煤が付着し灯明皿として使用されている。196～201は土師器坏である。202～205は明染、206は白磁小椀、207の青磁皿は内面見込みの釉は搔き取られ、外面豊付から底部は露胎である。208～211は青磁、212、213は陶器摺鉢。214は白磁で口唇部から外面口縁部の段まで釉が拭き取られている。215は陶器片口。216は粉引の粉青沙器。217は磨手の粉青沙器。218は褐釉陶器。219は須恵器甕口縁。220は褐釉陶器。221は陶器甕。222は陶器ろし皿。223は須恵質の程鉢。224は硬質な土鍋。225は上師質の程鉢。226は須恵質の程鉢。227～229、231、232はスタンプ文を有した瓦質の鉢。230、234は瓦質土器。233は土師質。

SE326、339、380

調査区北側のSE01の西側で検出された落ち込みである。規模と深さから井戸と思われるが、調査区内において井筒の検出はできなかった。南側の上端ラインは直線的で方形の掘方である可能性がある。調査過程において切合った遺構の存在が認められ、各遺構番号をもって分けたが1つの掘方内である可能性もある。



Ph.22 調査区北側井戸検出（南から）



Ph.23 SE276、279、349、323完掘状況（北から）

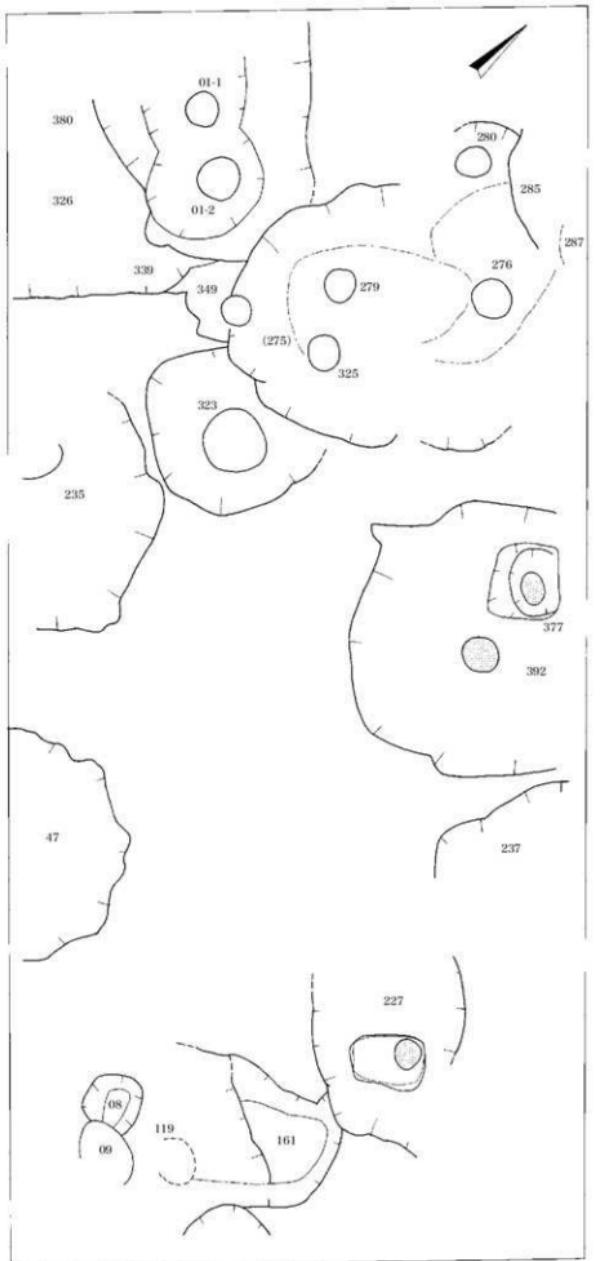


Fig.33 井戸配置図 (1/100)

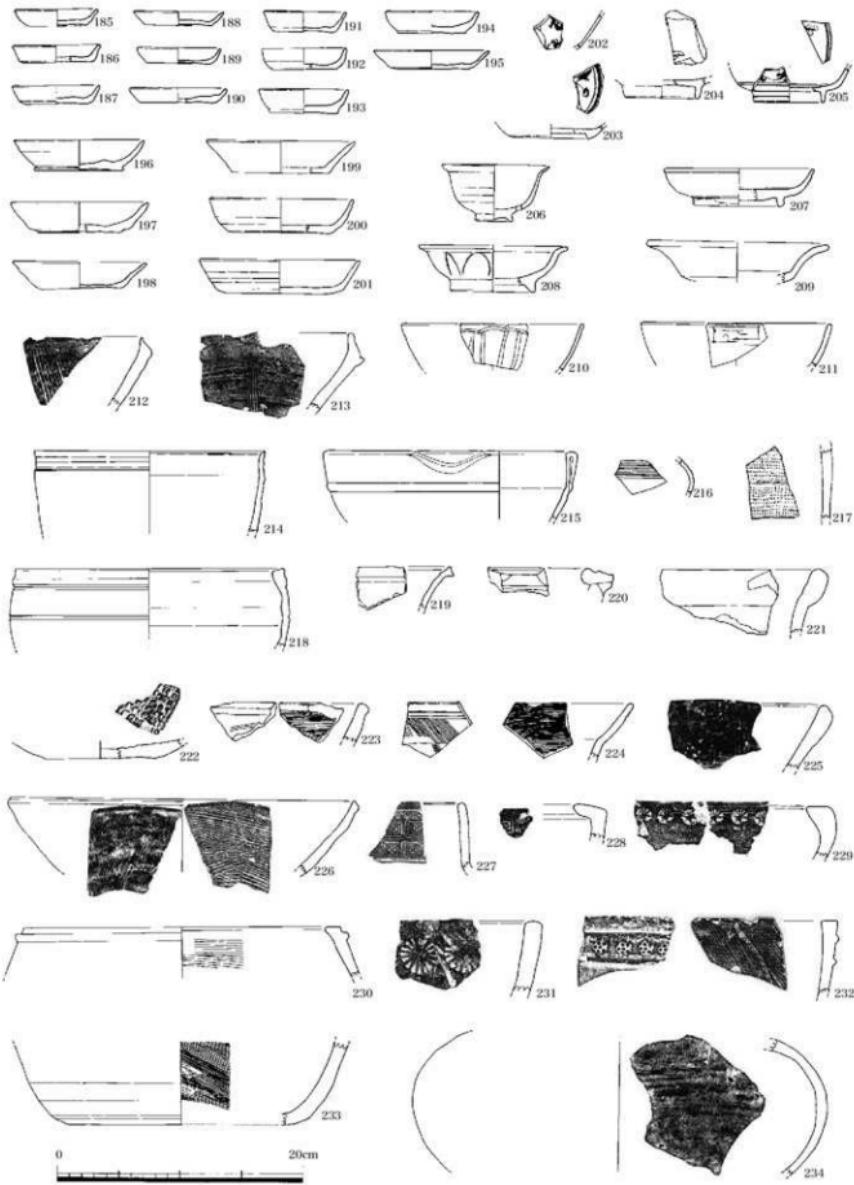


Fig.34 SE01 出土遺物実測図 (1/4)

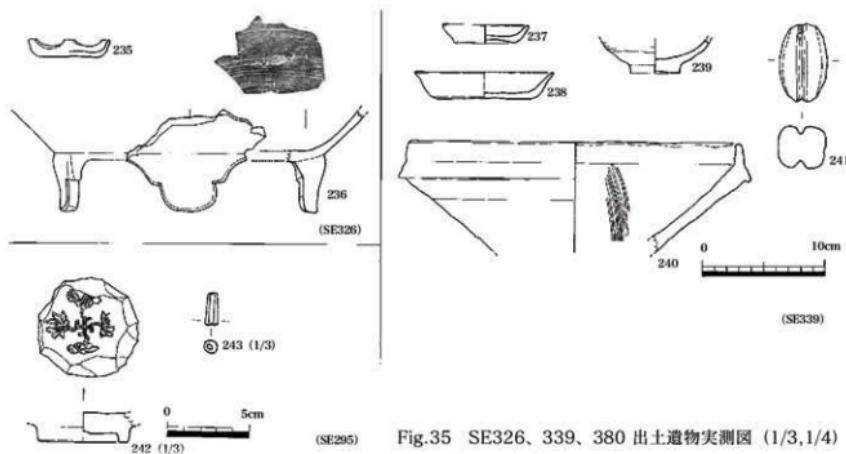


Fig.35 SE326、339、380 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

出土遺物

235の土師皿は割口に煤が付着する。236は瓦質の火鉢である。わずかに外反りした脚部の外面は研磨されている。237は土師皿、238は土師器壺、239の白磁は体部下半から底部にかけて露胎である。240は陶器摺鉢、241は土錘。242青磁椀の内面見込みにはスタンプ文を有す。243は土錘。

SE275, 279, 325

調査区北側で井筒が近接して検出された。井筒の径はいずれも70cm位である。検出面から約2.1m下げた標高70cmで湧水し発掘を中止した。SE275の西側で検出された掘方(SE349の遺構番号を付した)は径約2mで比較的小さく、SE279から切られている。SE279とSE325の切合関係は不明であったが、掘方の径は各3.6m、3.0m位と推定され、その平面プランは方形に近い可能性がある。いずれの井筒からも木質は検出できたが井筒の形状は留めていなかった。

出土遺物

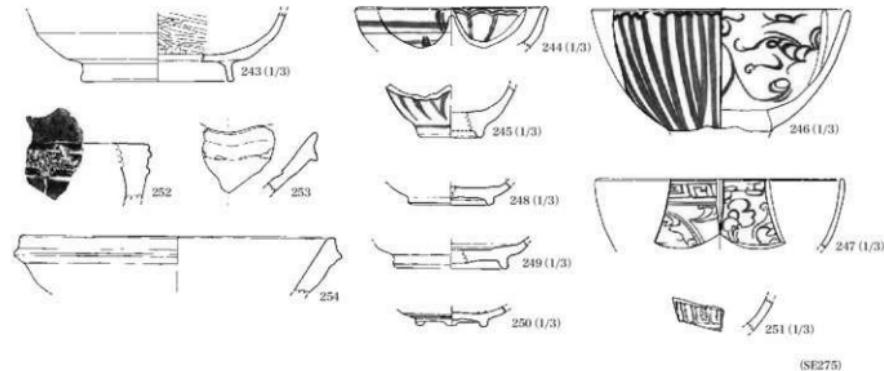
SE275 243は黒色土器、244の青磁椀は内面に複線による蓮弁文を有す。245は青磁小椀、246、247は青磁椀。247の釉色は比較的明るいオリーブ色を呈す。248の青磁椀底部は外面豊付まで施釉され、内側の露胎部分は赤褐色に発色している。釉色は空色に近い。249の青磁椀底部は外面の高台内側と内面見込みの釉は削り取られている。250の白磁小椀は高台を切り取っている。施釉は全面に及び、内面見込みに目跡を残す。251は白黒2色を用いた象嵌青磁である。252は瓦質鉢、253は備前摺鉢、254は滑石製石鍋である。遺物時期の下限は15世紀代におさまるものと思われる。

SE279 255は黒色土器、256、257は染付である。

SE325 258の青磁椀は内面見込みに門構えのような字がスタンプされているが判読できない。259は瓦質火鉢の脚部である。

SE276, 280, 285, 287

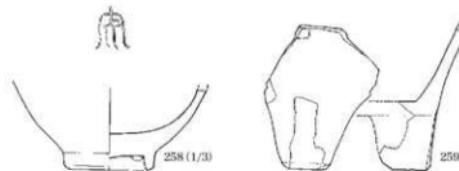
調査区の北東隅で近接して検出された。井筒が下部から検出されたSE276とSE280の切合は不明であったが、SE285は両者の掘方を切っていた。さらに調査区でSE287とした落ち込みが検出さ



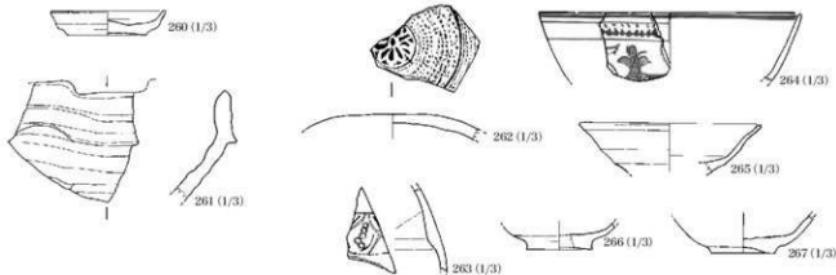
(SE275)



(SE279)



(SE325)



(SE280,285)



Fig.36 SE275, 279, 325, 280, 285, 287 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

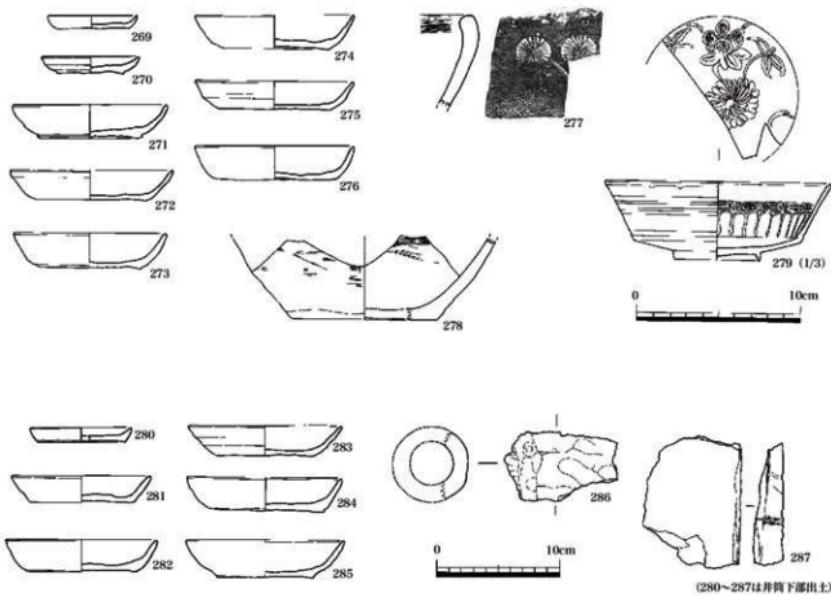


Fig.37 SE323 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

れた。SE276の井筒径は約80cm、SE280の井筒径は約65cmを測る。深さは他と同様に湧水してくる標高70cmまでさげたが、井筒の形状を留めた遺物はなかった。

出土遺物

SE280、285、260は口径7.0cmの土師皿。261は備前摺鉢。262は白土を用いた象嵌青磁の蓋である。263は白黒2色を用いた象嵌青磁の壺片である。264は染付、265は李朝の青磁碗。266は李朝の青磁、267は李朝の白磁でいずれも高台と内面見込みに粘土の目跡が残る。

SE287、268は染付である。

SE323

調査区の北側中央部で検出された。井筒（遺構番号323）の上部にSB01の根石が置かれ、切られていることが判る。下部には炭が多く分布し土師器坏が集中していた。井筒径130cm、掘方は方形に近い平面プランで軸長3.3mを測る。

出土遺物

269、270は土師皿で270の内外面には煤が付着する。271～276の土師器环は口径13.0cm前後を測り、272～274はほぼ完形である。271の口縁部には煤が付着している。277は瓦質の火鉢。279は青味を帯びた中折れの白磁である。内面見込みに菊花と蓮、体部の下位に雷文と蓮弁が型押しされている。口縁端部の軸は掻き取られた口ハゲである。外面の高台内の軸も軽く拭き取られている。278は須恵質に近い灰色を呈した捏鉢である。



Ph.24 SE392 完掘状況（南から）

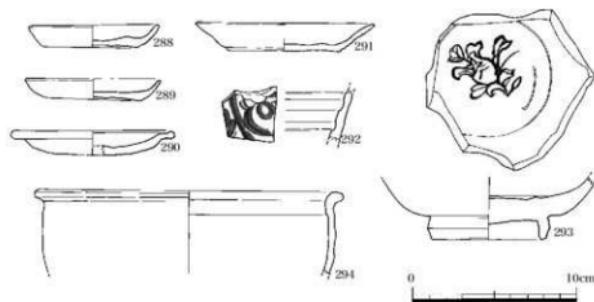


Fig.38 SE392 出土遺物実測図 (1/3)

280～287は井筒の下部から出土した。280は土師皿、281～285の土師器環は口径12.6～13.0cmを測り上部出土のものと変わらない。286は鞆の羽口、287は粘板岩製と思われる砥石である。側面の砥面のみ原形を保つ。

SE235

調査区北よりの西壁際で検出された。北側に基礎杭が打ち込まれ掘方と井筒の一部が破壊されてい

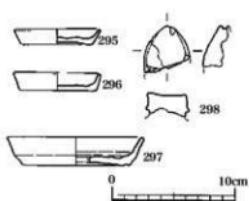


Fig.39 SE237 出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物
下部から $1 \times 1.2\text{m}$ の楕円形プランの井筒が検出されたが、いづれも原形を留めた木質は検出できなかつた。

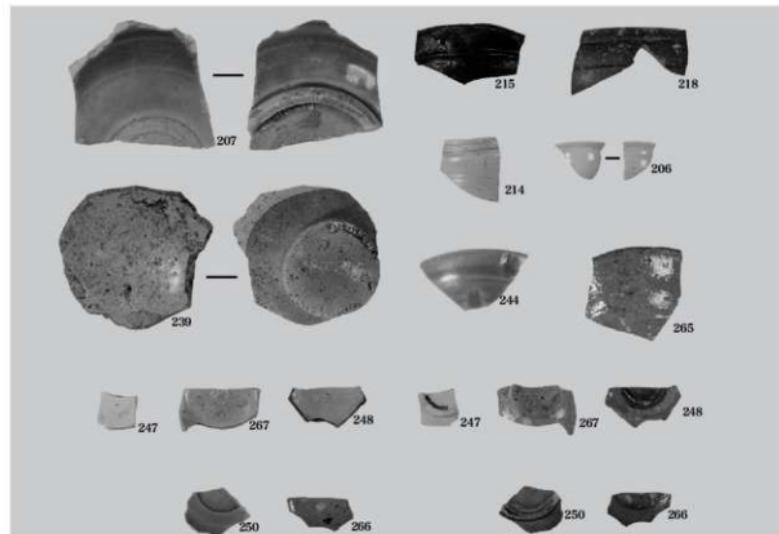
出土遺物

291、293は方形枠377内から出土。288～290は土師皿で290は口縁端部を折り返し肥厚させた「ての字」口縁である。291は土師器坏、292は青白磁、293の青磁碗は内面見込みにスタンプ文を有し、外面高台内は輪状に釉が焼き取られている。294は陶器壺である。

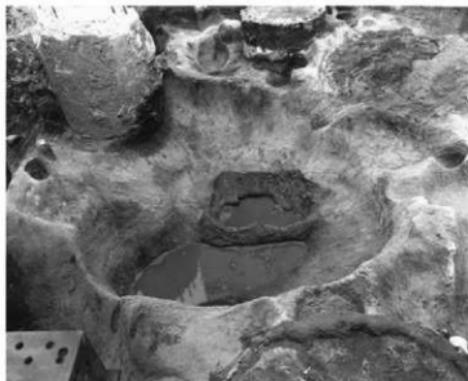
SE237

調査区中央の東壁際で検出された。中央が基礎杭によって破壊され、井筒の検出はできなかつた。
出土遺物

295、296の土師皿は口径7.0cm前後を測り、296の口縁部には煤が付着している。297は土師器坏、298は土鍾である。



Ph.25 SE01 出土遺物



Ph.26 SE227完掘状況（北西から）



Ph.27 SE227 井戸枠検出状況（北西から）

外側へ反っている。310の平瓦は凸面に繩目タタキを部分的に残したナデを施し、凹面の布目はほとんどナデ消されている。311～314の土錘は311、312が幅広の円形に近い形態を呈す。315は滑石製石鍋の口縁部片を再加工したものと思われる。外面に側縁に沿った溝を整で斜め方向に抉り込みながら成形し、内面と一方の側縁にも途切れるか同方向の溝が削り込まれている。

SE227

調査区南よりの中央部で検出された。掘方は他の遺構との切合いで不明瞭となっているが⁵、軸長約3mの円形に近いプランと思われる。検出上面で白色の石灰質が層厚50cm程堆積した1×1.5mの長方形プランが検出された。その下層も湧水してくるまでの発掘が可能な検出面からの深さが約1.8mまで壁が直に立つ。下底近くで径70cmの円形の井筒が検出された。

出土遺物

298、299は土師皿で、299は「て」の字口縁である。300は土師器坏。301は軟質の須恵器（猩鉢か）の破片を打ち欠いた道具と思われる。302の須恵器壺片の外面には格子タタキが残り、黒色に近い灰釉がかかる。303は黄灰色を呈した軟質の須恵器壺鉢である。内面の摩耗風化が著しい。304は土師質の土鍋。305は瓦質火鉢である。

306～310は方形の井戸枠から出土した。306は土師器坏。307は褐釉陶器、308は器面が灰白色を呈した瓦質鉢である。309は瓦質の火鉢脚部である。鍋のある花弁の形状で

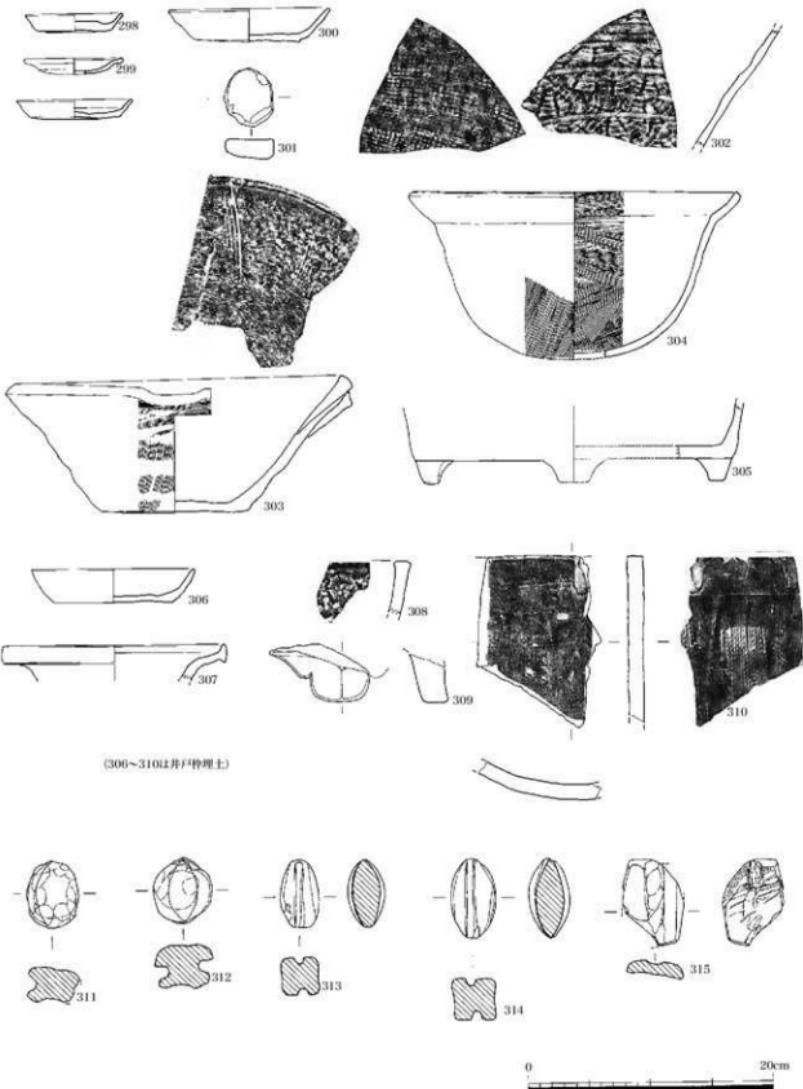


Fig.40 SE227 出土遺物実測図 (1/4)

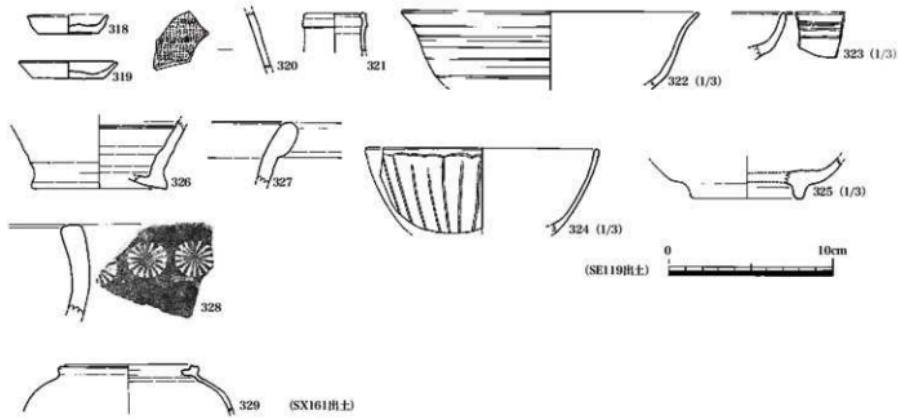
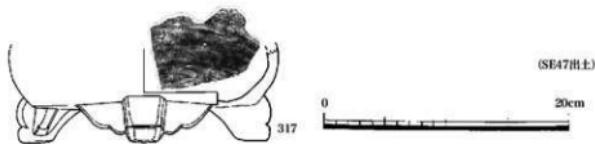
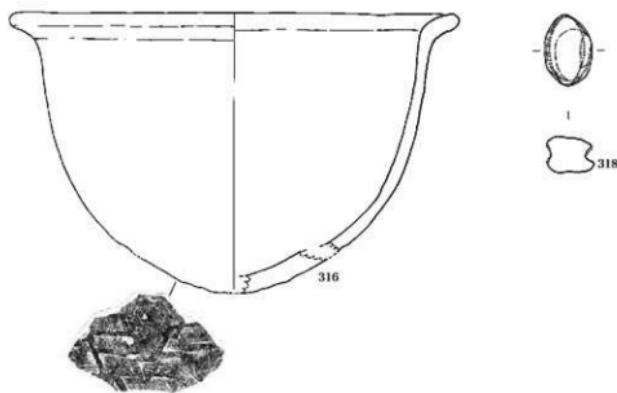
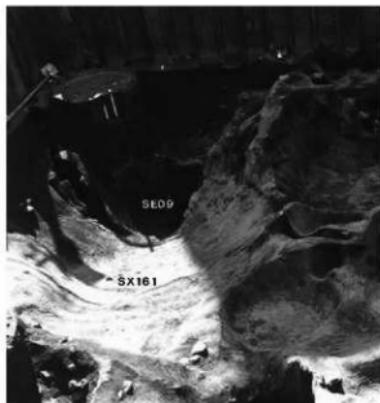


Fig.41 SE47,119,SX161 出土遺物実測図 (1/3,1/4)



Ph.28 SX161 検出状況（北西から）



Ph.29 SX161、SE09 検出状況（北東から）

SE47

調査区南よりの西壁際で検出した。中央部が基礎杭によって破壊され、矢板の際であったことから掘り下げは部分的で、井筒の検出はできなかつた。掘方は径4.8m程の円形プランと推定される。

出土遺物

316は土鍋である。底部付近に斜格子のタタキ痕が残る。317は瓦質火鉢の脚部、318は土鍾である。

SE119、SX161、SK08

調査区南西隅で検出された。南側に向かつて地山の黄灰色砂は下降し、その上層の堆積土をSX161とした。下降した地山の砂丘砂を直線的に切ってSE119が検出された。井筒は

調査区南際が発掘できなかつた為に検出できなかつた。

現代井戸SE09に接し、上面から径1.2mの円形プランを呈したSK08が検出された。SK08の堆積土上部には拳大の礫が集中し、深さは約1.2m（標高1.5m）と浅いが井筒の可能性もある。

出土遺物

SE119

318、319は土師皿、320の粉青沙器は外面に繩簾文を施し、内面の一部にも施釉がみられる。321の陶器は内外面に黄灰色と緑灰色の施釉がみられる。322は白磁椀、323は3本の横線を白土で象嵌した粉青沙器である。324は龍泉窯系青磁で、火熱を受け白渦している。325の青磁椀は内面見込みの釉は掻き取られ、高台内の外底部も露胎である。326の陶器は火熱を受け、外面の垂下した釉は白渦している。327は備前窯、328は瓦質の火鉢である。

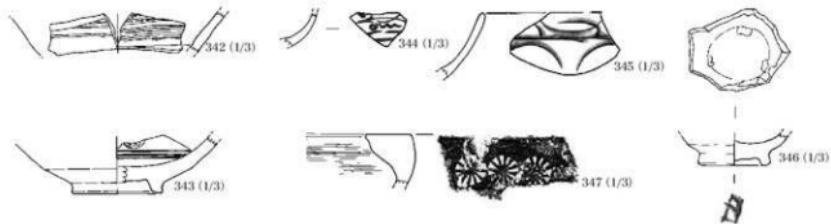
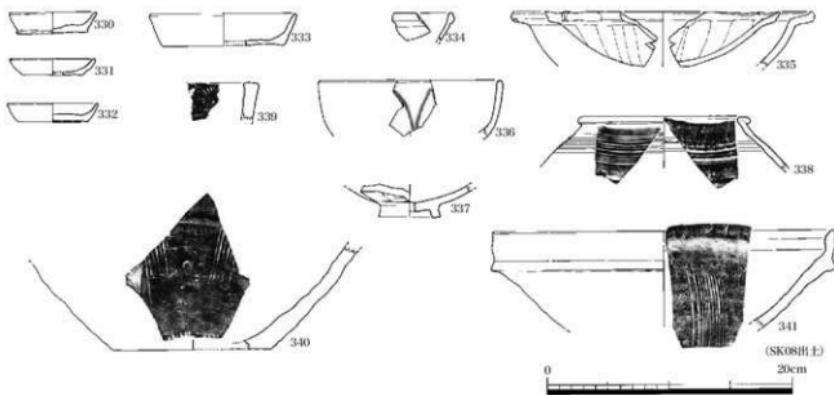


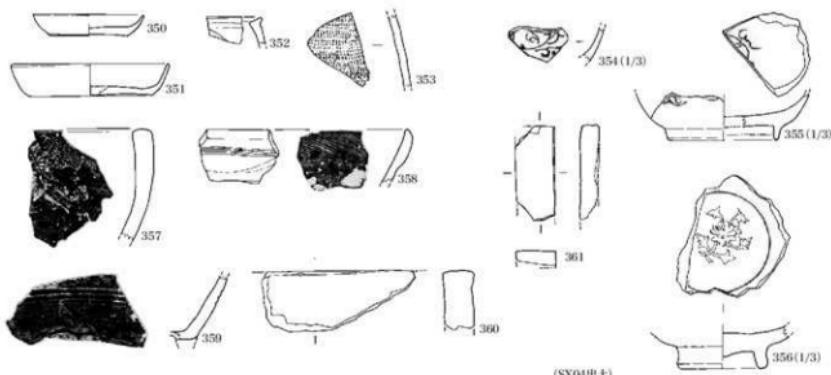
Fig.42 SK08,SE09 出土遺物実測図 (1/3,1/4)

SX161

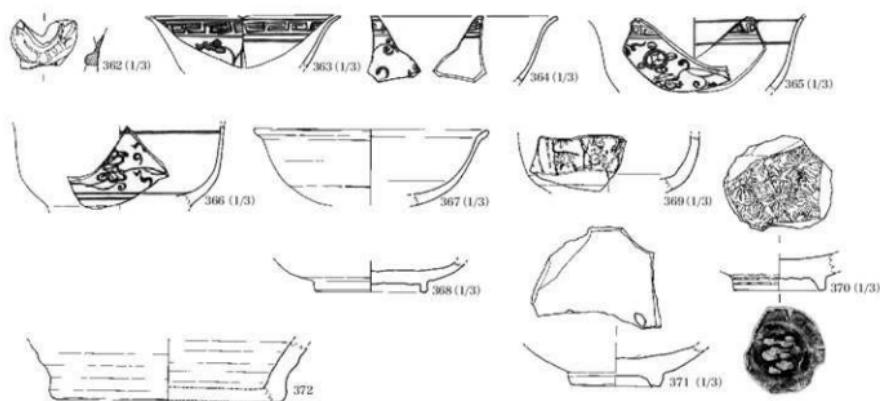
329は褐釉陶器壺である。口縁部の頸状に張り出した部分の外面の釉は拭き取られている。

SK08

330～332の土師皿、333の土師器环はいずれも小片であるために口径の誤差が大きい可能性がある。334は玉縁の白磁碗。335は青磁盤。張り出した口縁部は稜花となっている。内外面体部に蓮弁文のような弱い起伏がみられる。336は龍泉窯系青磁、337は青磁碗の高台置付から内側の底部にかけては無釉である。338は褐釉陶器壺、339は器面が剥落し黄灰色の土師質に近い瓦質の火鉢片、340、341は備前摺鉢



(SX04出土)



(SX114出土)

Fig.43 SX04,114出土遺物実測図 (1/3,1/4)

SE09（現代井戸）

342は横線に白土を象嵌した粉青沙器。343も象嵌を施した粉青沙器で全面施釉されている。344は明染。345は青磁楕、346の白磁楕は内面見込み4箇所に緑色がかかった粘土目跡が残り、外面の体部下位から底部にかけては無釉である。外底部に墨書痕があるが、判読不能。347は瓦質火鉢片。

348、349はSK08、SE09の西側周辺から出土した。348は同安窯系青磁楕。349の青磁楕は高台下位から埋付、底部にかけて無釉である。

5 その他の遺構と遺物

SX04、114

調査区南側の前項で記したSX161、SE119の上層の整地土として記録した。SX114はSX04の下に堆積した礫を多く含む黒灰砂質土で、一部溝状に続いている。

出土遺物

SX04

350は土師皿、351は土師器壺、352は陶器、353は磨手の粉青沙器、354、355は細い線刻で草花を描いた白磁である。356は見込みにスタンプ文を有した青磁碗で、外面高台内の軸を輪状に搔き取る。357は瓦質の鉢、358は灰白色の須恵質捏鉢、359は瓦質鉢の底部。360は磚と思われるが、2次火熱を受けている。361は砂岩製の砥石。

SX114

362は土製の人形である。胸の一部と両腕をつないだ袖の部分が残る。363～366は青花である。367、368は青磁で、368の外面高台内は無軸である。369は黒、白色土の象嵌青磁。370は白土による印花の象嵌青磁で高台内の外底部に棒状のもので突いた痕跡が残る。371は白土を掛けた粉青沙器であるが、外面は劣化している。内面見込みに粘土の目跡、外面高台疊付と内側に砂が付着している。372は陶器底部で、遺存する内外面施釉されている。

SK05、174

調査区南よりの中央部で検出された。南側の上層遺構のSK05として長方形プランを検出していったが、下底は地山の砂層まで達し、崩壊で膨らんだプランとなつた。下部をSK174としたが、上部のSK05と同一遺構である。南辺よりの下底に3個体の土師器壺が埋置されていた。

出土遺物

373～375は基底部に埋置された土師器壺である。口径が小さい373は2/3が遺存し、374、375は完形である。3個体ともに内面に煤が付着する。375の底部には焼成後に穿った径1.7cmの孔を有す。

376～384はSK05とした上部の埋土から出土した。376は土師皿、377は土師器壺、378の土師質鉢は口縁部を段を有して外方へ張り出し、端部は断面三角形でつまみ上げられている。379は小型の瓦質鉢。380は外面が明黄褐色、内面はアズキ色の硬質な土師質の摺鉢。381は須恵質の摺鉢。382は細い線刻文様を有した白磁碗。383は青磁小碗。内面見込みにスタンプ文を有す。水裂は体部上位には無く、下位に粗くみられる。外面高台内の軸を輪状に搔き取る。384の青磁碗は外面高台疊付から外底部は無軸。

SK07

385～387は調査区の南西隅の検出時に出土した。385は赤褐色を呈して焼き締まった陶器鉢である。386、387は内面にガラス化した銅滓が付着した坩堝である。

その他の遺物

388はSK12の東側に接した土壤から出土した軸の羽口である。389は天目碗、390は内面見込みに「長命富貴」、外底部に「大明年造」の銘が記された染付である。



Ph.30 SK174 完掘状況（西から）

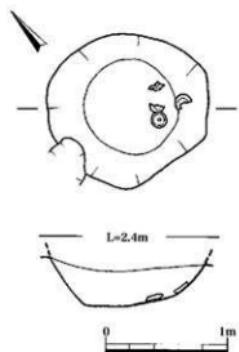


Fig.44 SK174実測図 (1/40)

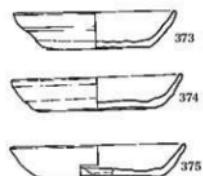


Fig.45 SK174 出土遺物実測図 (1/4)

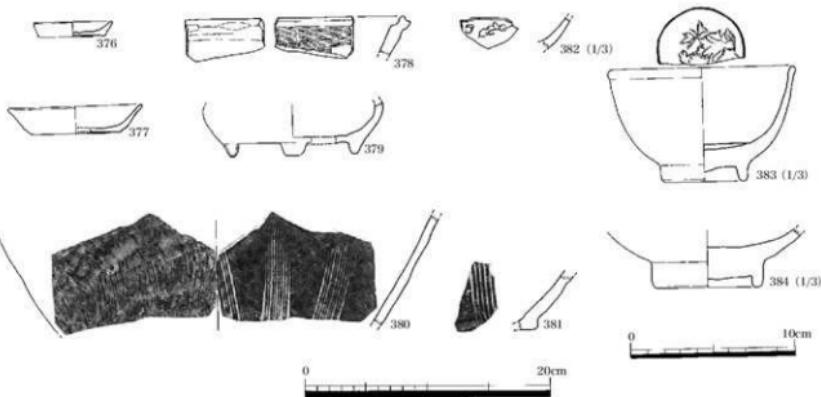


Fig.46 SK05 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

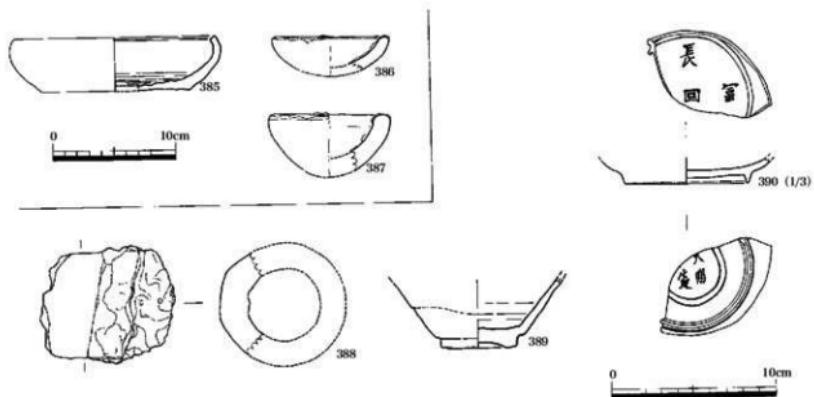


Fig.47 その他の遺物 (1/3, 1/4)



Ph.31 その他の遺物

IV 博多143次調査出土動物遺存体について

調査にあたって水洗選別などは行っていない。出土した動物遺存体は哺乳類がイノシシ・シカ、イルカ・クジラ類、ウシ、ウマ、魚類はタイ類、サメ・エイ類、スズキ、斧足類はアサリ、マジミを確認した。腹足類と魚類は手持ちの標本が少なく同定できなかつた資料が多い。今後も同定作業を続けていく予定である。

イノシシ 左上顎歯のM1、M2と上腕骨が出土した。M1は咬耗がやや進んでいるがM2はほとんど咬耗していない。若い個体である。椎骨と肋骨が出土したがシカと区別できない。どちらも遺存状態は悪い。解体痕などは確認できなかった。

クジラ類 椎骨が2点出土した。長さは10cm前後を測る。どちらも棘突起、横突起を刃物により切断しており、側面や関節面にもナタ状の刃物痕がみられる。

イルカ類 椎骨の他に下顎、聴骨包、肋骨などが出土した。解体痕がみられるものも多い。45の環椎は椎頭と椎窓の間で切断されている。頭蓋骨を打ち落としたときの切断痕と思われ、椎頭側が頭蓋骨に付着して持ち込まれたものと考えられる。

鳥類 中手骨が2点出土した。形態の違いから別の種であると思われるが、同じ左翼で近位端が刃物により切断されている。同様な例は博多第29次調査でも出土している。29次調査分では切断された骨端部に焼けた痕跡がみられ、炎って食べた事がわかる。

マダイ 肩甲骨、舌頸骨、前上顎骨、前頭骨、第2臀鰭棘が出土した。いずれも頭部に伴う骨である。72の魚類椎骨がマダイの椎骨である可能性はある。前頭骨は中央から梨割にされており、煮物として利用されたと思われる。その他の骨には切断痕はみられない。

タイ類 クロダイの可能性があるものをふくめて4点が出土した。第2臀鰭棘が多い。切断痕などはみられない。

その他の魚類 角骨、歯骨、主鰓蓋骨、前上顎骨などが出土した。ほぼ全体が残っている部位もあるが、標本がないため同定できなかった。

小結 今回出土した動物遺存体のほとんどは食料としての肉について遺跡内に持ち込まれた物である。もっとも多く出土する物はイルカ・クジラ類の椎骨である。近世には、蒲が捕鯨を奨励し玄界島を中心に捕鯨が試みられた時期もあるためか、博多遺跡内では多量のイルカ・クジラ骨が出土する。魚類では梨割にされたマダイの前頭骨が出土しているが、隣接する144次でも近世の遺構から出土しており、マダイの頭部は汁物という食べ方が定着していたものと思われる。魚類は同定できなかつた骨を加えると70点以上と多く出土しており、その中には細かな骨もあるが、椎骨は1点しか出土しておらずほとんどが頭部の骨である。巻貝が多く出土している。種の同定はできなかつたがかなり大型と思われるものもある。また、近位端に切断痕がある鳥類の中手骨が同じ遺構から2点出土した。他の部位の骨は見あたらない。他の調査区でもイスや鳥の同じ骨だけ複数出土する例があり、これは個人が1羽丸ごと仕入れてさばくのではなく、既に解体された動物の必要な部位だけを購入するという肉屋の存在を想像させる。SX117から出土したシカ大腿骨近位端(66)は端に鋸の切断痕があり、骨角製品の材料となる幹の部分を切りとった後の廃棄品である。隣接する第144次調査でも同様に切断されたウシの中足骨やシカの大脛骨とともに骨角器の材料と思われる骨片が出土しており、本調査区周辺に骨角製品製造工房が存在したことが判ってきた。

種別	生息 区	属	种	大 分類	小 分類	記号名	左名	部分 1	部 分 2	成 熟 度	切 齧	火 烧	標 印	時 代
1	1区南側地土	魚類	サメ・エイ科	椎骨						不明	なし	光明	縦 3 cm 斜めに凹い	
2	1区南側地土	鰐鱗骨		哺乳類	シカ	中足骨		前脚のみ		不明	なし	なし		
3	2 8.5 - 2.8.6	下部	魚類	ウシ?		中手・中足骨	不規	細孔化		骨化済み	あり	丸い	一力方に集中する。直進不規	
4	S D 1.5		魚類					小舟			なし	不明	タケノコ上唇先端の刃状紋に似たが大きい	16C
5	S D 1.5		魚類			主頭骨	左	1/4後端		不明	なし	なし		x
6	S D 1.5		魚類			前上脛骨	右	わざとしに欠損		不明	なし	不明		x
7	S D 1.5		魚類			前上脛骨?		骨端部欠損?		不明	なし	なし		x
8	S D 1.5		魚類	マダイ		前上脛骨		周縁欠損		不明	なし	なし		x
9	S D 1.5		魚類	マダイ		前上脛骨		前縫合欠損		大型 8.0 cm(L)	なし	なし		x
10	S D 1.5		魚類	不規										x
11	S D 1.5		魚類			脚骨				不明	なし	不明		x
12	S D 1.5		哺乳類	イノシシ		左上脛骨	M 1 と M 2	M 2 は後手欠損	M 2 はほとんど咬合なし	なし	なし	大型の特徴		x
13	S D 1.5		1-2区ペント	魚類		内脛骨							遺伝的	x
14	S D 1.5		1-2区ペント	魚類	タイ類	第2脚趾骨		周縁欠損		不明	なし	光明		x
15	S D 1.5	2区	魚類	マダイ		前頭骨	左	前半骨欠損	大型	中央で断裂	不明			x
16	S D 1.5	下部	魚類			主頭骨	左	前縫合のみ		不明	なし	不明	マダイに似るが異なる	x
17	S D 1.5	下部	魚類			上脛骨		前半骨欠損		不明	なし	不明	マダイに似るが異なる 遺伝的	x
18	S D 1.5	下部	魚類			上脛骨		前半骨欠損		不明	なし	不明		x
19	S D 1.5	下部	魚類			上脛骨		前半骨欠損		不明	なし	不明		x
20	S D 1.5	下部	魚類	マダイ		前上脛骨	右	近端上脛骨欠損		不明	なし	不明		x
21	S D 1.5	下部	魚類	マダイ		前上脛骨	右	近端と上脛骨		不明	なし	不明		x
22	S D 1.5	下部	魚類			中手骨		近位端	近位切歯	不明	あり	不明	近位頭部は刃物で切断	x
23	S D 1.5	下部	魚類			中手骨		近位端	近位切歯	不明	あり	不明	近位頭部は刃物で切断	x
24	S D 1.5		魚類	サメ・エイ科		椎骨				不明	なし	なし		x
25	S E 0.1	下	哺乳類	イルカ類		椎骨				椎頭蓋骨化	なし	BFcr 4 .8 cm		15C
26	S E 0.1	上部	魚類			主上脛骨?		近位端か		椎頭蓋骨化	なし		椎頭蓋骨化	x
27	S E 0.1	上部	魚類	スズキ		角骨	左			GL 6 .2 cm	なし	なし		x
28	S E 0.1	上部	魚類	スズキ		主上脛骨	左	不規	大型	なし	なし	なし		x
29	S E 0.1	上部	魚類	マダイ		主上脛骨	左	不規	大型	なし	なし	なし		x
30	S E 0.1	上部	魚類	不規		右	下脛骨欠損		8.0 cm(前後)	なし	なし			x
31	S E 0.1	上部	哺乳類			骨片					あり	なし	椎毛形の一部か	x
32	S E 0.1	上部	哺乳類	イルカ類		肋骨					なし	なし	両側を刃物で切断	x
33	S E 0.1	上部	哺乳類	イルカ類		胸骨		周縁欠損		不明	なし	なし	両側を刃物で切断する	x
34	S E 0.1	中	魚類	クロドア?		第2脚趾骨		構成のみ	先端欠損	GL 4 .5 cm	なし	なし		x
35	S E 0.1	中	魚類	クロドア?		第2脚趾骨		先端欠損		不明	なし	なし		x
36	S E 0.1	中	哺乳類	イルカ類		椎骨		先端					4 .0 ~ 6 cm	x
37	S E 0.1	中	哺乳類	イルカ類		椎骨								x
38	S E 0.1	中部	魚類			主上脛骨	左			不明	なし	なし	長さ 5 .3 cm	x
39	S E 0.1	中部	魚類			主上脛骨	左	一部欠損		不明	なし	なし	長さ 3 .3 cm	x
40	S E 0.1	中部	魚類			中足骨		周縁欠損		不明	なし	なし	椎頭蓋骨 6 .5 cm 距離 8 cm	x
41	S E 0.1 ~ 2		魚類			前脚				不明	なし			x
42	S E 0.1 ~ 2	下部	魚類			前脚				不明	なし		PL 5 .0 cm 削とけき マクロカツミ?	x
43	S E 0.9 ~ 1.0	井戸内	魚類			前脚	右			長さ 3 .5 cm	なし	なし	直進不規 斧子に因る	x
44	S E 1.2	下部	哺乳類			前脚				不明	なし	なし	イシノン・シカより大き	15C
45	S E 2.5 ~ 4		哺乳類	イルカ類		椎骨		右側頭部の 2/3 のみ	近位切歯	不明	なし	ナタによる切断	不明	
46	S E 2.7.5		腹足類			脚柱				不明	なし	不明	直進不規 斧子に因る	
47	S E 2.7.5		哺乳類	イノシシ・シカ		肋骨		近位端欠損		不明	なし		骨端部を削る	
48	S E 3.2.5		腹足類			脚柱				不明	なし	不明	直進 1 .1 cm を削る	
49	S E 3.3.2		哺乳類	イルカ類		脚柱				未分化	なし			
50	S E 3.3.2	井戸内	哺乳類	クジラ類		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ状幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
51	S E 3.7.7	井戸内	哺乳類	クジラ・ウマ		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ状幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
52	S K 1.2	下部	哺乳類	ウシ・ウマ		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ状幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
53	S K 1.2	下部	魚類	不規		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ状幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
54	S K 3.5.8	ペルト	腹足類			脚柱		周縁欠損		不明	なし		骨突起付ける刃物で削る	
55	S P 3.9.1		哺乳類	イルカ類		下脚		長さ 8 .3 cm 連作		不明	なし	なし	下脚部 1 .8 cm、尾部 1 .2 cm 小型 傷は	
56	S P 4.0 .7 ~ 4.0 .8		哺乳類	イルカ類		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ状幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
57	S X 0.5	上部	哺乳類	ヒト?		頭蓋骨				椎頭蓋骨化	ナタ状幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
58	S X 0.6		哺乳類	ウシ・ウマ		下脚?		下脚部?		6 ~ 4 cm の骨片	不明	なし	骨突起付ける刃物で削る	15C
59	S X 0.7		魚類	?										x
60	S X 0.8		哺乳類	イルカ類		脚柱				脚柱のみ	不明	なし	脚柱は凹角	
61	S X 0.8		哺乳類	イルカ類		脚柱				脚柱のみ	不明	なし	脚柱 4 cm	
62	S X 1.1.4		魚類	サメ・エイ科		脚柱				脚柱のみ	不明	なし	脚柱から脚部にかけてカットマーク	
63	S X 1.1.4		哺乳類	イルカ類		脚柱?		脚柱?	周縁欠損	骨化済み	あり	なし	脚柱から脚部にかけてカットマーク	
64	S X 1.1.4	下部	哺乳類	イノシシ		上脚骨	左	遠位端		骨化済み	不明	なし	脚柱から脚部にかけてカットマーク	
65	S X 1.1.7		哺乳類	シカ		大脛骨	右	遠位端		骨化済み	なし	なし	脚柱から脚部にかけてカットマーク	
66	S X 1.1.7		哺乳類	シカ		大脛骨	右	遠位端		骨化済み	なし	なし	脚柱から脚部にかけてカットマーク	
67	S X 1.3		哺乳類			脚柱				骨化済み	なし	なし	脚柱から脚部にかけてカットマーク	
68	S X 1.6	No 1	哺乳類	クジラ類		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
69	S X 1.8.1		腹足類			脚柱				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
70	S X 2.4.7	No 1.9	腹足類			脚柱				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	15C
71	S X 2.7	下部	魚類	サメ・エイ科		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	x
72	S X 2.7	上部	魚類			椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	x
73	S X 3.2.7		哺乳類	イルカ類		脚柱				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
74	S X 3.2.9		哺乳類	イルカ類		脚柱				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
75	S X 3.3.5		哺乳類	イルカ類?		脚柱				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
76	S X 3.3.9		哺乳類	イルカ類?		脚柱		不明		椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
77	S X 3.3.9		腹足類	アザリ		脚柱		不明		椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
78	S X 3.8.0		哺乳類	イノシシ・シカ		椎骨				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	
79	S D 1.5	1区	魚類			内脛骨				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	16C
80	S D 1.5	下部	魚類			主上脛骨など				椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	16C
81	海陸 基盤		足足類	マジンガ						椎頭蓋骨化	ナタ幅	なし	骨突起付ける刃物で削る	

この表のナタの跡とはナタによる横方向に削る跡である。骨柱を斜めに削ったときに「ねじれ」がかかる跡を示す。

哺乳類の脊柱刺検査は A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES による。

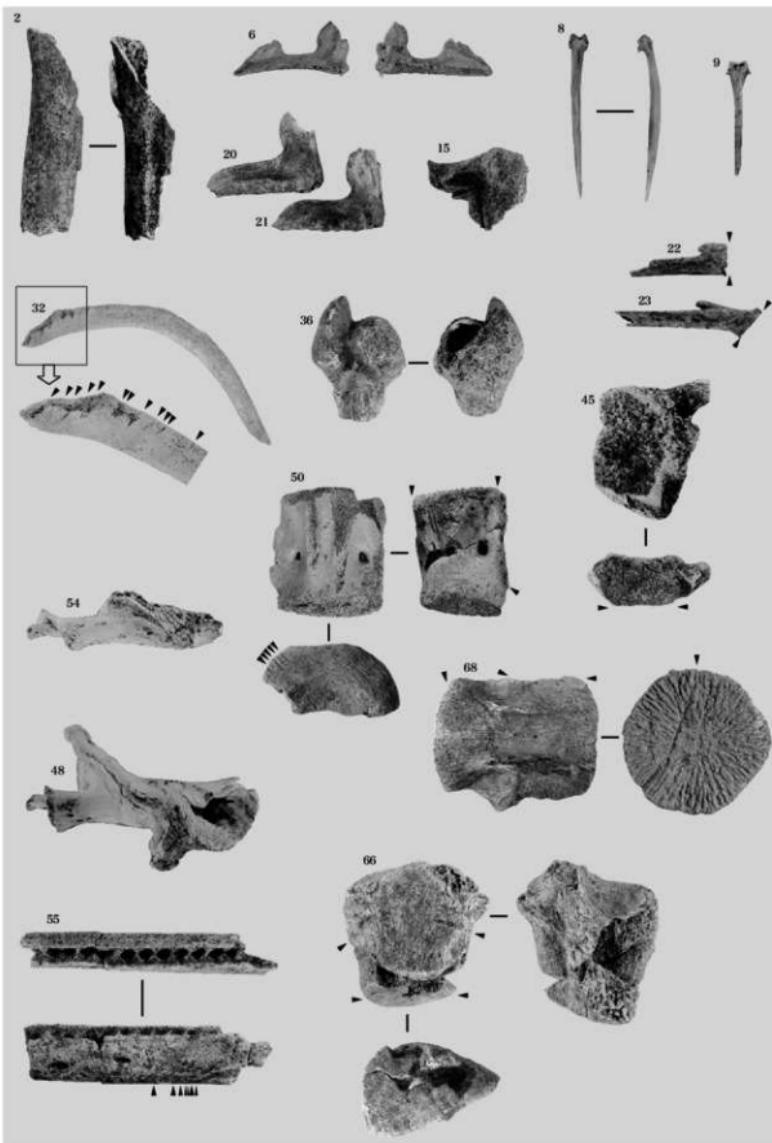
参考文献

考古学と動物学 西本謙弘・松井麻織、岸井社 1999

化的知識、同様の 東洋編集 1984

遺跡復元実習の手引書(1) 梶原二、『動物考古学 第2号』 1994

Atlas of Animal Bones ELSIEBETH SCHMID ELSEVIER PUBLISHING COMPANY



Ph.32 出土動物遺存体

V 博多143次出土銅錢

44枚の銅錢が出土した。銭文と枚数をTab 1に、遺構別の出土銭文をTab 2に示す。Fig 48には主要なものの拓本、又は透過X線写真を付した。No 8, 29, 40など腐食が著しく、從来の鑄取りや透過X線写真での文字判読が困難であったものに関しては、研ぎ出し^{註1}により銭銘を解読した。(片多)

註1 片多雅樹 2005「博多遺跡群第144次調査出土銭について」『博多104』福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集 福岡市教育委員会

Tab.1 出土「銅錢」一覧表

銭文	鑄年	時代	枚数	銭文	鑄年	時代	枚数	銭文	鑄年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	3	天聖元寶	1023	北宋	1	元符通寶	1098	北宋	1
宋通元寶	968	北宋	1	皇宋通寶	1039	北宋	2	永樂通寶	1368	明	5
太平通寶	977	北宋	1	治平元寶	1064	北宋	1	洪武通寶	1368	明	2
至道元寶	995	北宋	1	熙寧元寶	1068	北宋	2	欠損			15
咸平元寶	999	北宋	1	元豐通寶	1078	北宋	4	判読不能			2
天禧通寶	1018	北宋	1	元祐通寶	1093	北宋	1				計44枚

Tab.2 遺構別「銅錢」一覧表

No.	出土遺構	銭文	No.	出土遺構	銭文	No.	出土遺構	銭文
1	128	洪武通寶	16	SE280	治(平)元寶	31	SK27上部	× 通××
2	318	× 聖元×	17	SE280	元豐通寶	32	SK290	熙寧元寶
3	3区廐土	永樂通寶	18	SE280 井箇	永樂通寶	33	SK328	咸平元寶
4	SD147 2区	至道元寶	19	SE280 285	× × 元×	34	SP277	元豐通寶
5	SD328 下部	□ × × ×	20	SE280 285	元× × 寶	35	SX102(SE09そば)	元祐通寶
6	SE01 No2 堀方下部	洪武通寶「背桂」	21	SE280 285	元豐通寶	36	SX114	× × × 寶
7	SE119 上部	永× × 寶	22	SE280上部検出	永樂(通)寶	37	SX12 下部	× × 通寶
8	SE130 下部	皇宋通寶	23	SE286	元豐通寶	38	SX14	□ × × ×
9	SE131	永樂通寶	24	SE325 No1	開元通寶	39	SX173	開元通寶
10	SE235	× × 元寶	25	SE326	(開)元通(寶)	40	SX238 上部	(聖)宋(通)寶
11	SE235 下部	天聖元寶「背十條力」	26	SE347 壁際	□ □ × ×	41	SX61 上部	開× 通寶
12	SE275	□ □ □	27	SE392(井箇377)	× 聖× ×	42	整地土135	熙寧通寶
13	SE279	宋(通元)寶	28	SE392(井箇377)	太(平通寶)	43	整地土241	天禧通寶
14	SE279	× 熙元寶	29	SK06-2 壁際	熙寧力元寶	44	ラヘ'ルなし	永樂通寶
15	SE279	× × 通寶	30	SK18	元符通寶			□ :判読不能 × :欠損 () :又は だが限定できる

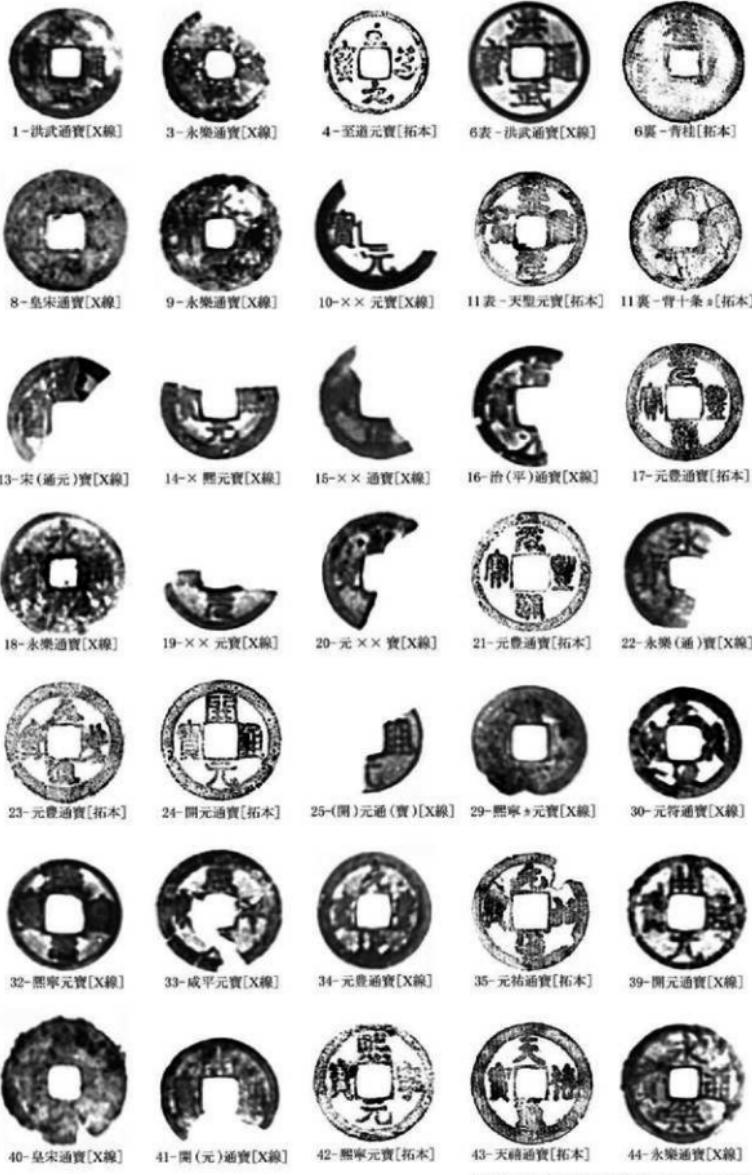


Fig.48 出土「銅錢」

VII おわりに

表土剥ぎで北側においては砂丘砂のほぼ上面、南側では砂丘砂の約20cmほど上位まで削られていた。担当が交代したのであるが、この上部は極めて新しい時期の層であったとのことである。従って、今回の調査において17世紀以降の唐津や伊万里の陶磁器がみられないのは、近世の整地層まで多くの近現代の遺構が達していたためとみられる。検出された遺構は14世紀～16世紀には限られるが14世紀代のものはSK399やSE323等の一部に限られる。

検出された主な遺構は方形プランの土壙、溝、井戸等であるが、その主軸方位は現在の町並み、すなわち、16世紀末以降の太閤町割より14° 東に振れたN(真北) -35° -Wをとる。既往の調査成果ではこの方位は砂丘地形に規制され13世紀以降から続くものとみられている。

今回の第143次調査では第42次、60次、83次等で検出されているような蔵の可能性がある石敷の基礎や石積土壙は検出されなかつたが、方形に板壁を築いた可能性があるSK12や、SK201など地下構造をもった遺構が検出され、粉青沙器やベトナム陶器が出土していることから、42次、60次同様に相応の商人が占有していた区域であった可能性がある。その配置にもSB01とした石の礎板を有した柱列より北側では井戸群が古め、南側では土壙群が配置された企画性がみられる。

遺物の中でSX149から出土した鉄滓、鞆の羽口や整地層から出土した銅滓が付着した坩堝など、鍛冶や鋳造関連の遺物のほか、生産関係の遺物は（V）で記したように骨角製品製造を示す動物遺存体も出土している。このような遺物は隣接した第60次、144次調査でも出土し、職人の工房が近くに存在していたことを窺わせる。今後、屋敷、蔵、工房など具体的な遺構の配置から町並み復元されていくことが期待される。

遺物に関しては特にSK247出土の朝鮮陶器甕、明代の青花、備前摺鉢、土師皿は混入が少なく、16世紀中葉くらいの一括性の高い資料と思われる。また、SX153に象嵌青磁の椀の完形が埋置されていたものは度重なる戦火による破壊や略奪を免れようとしたものか、先の蔵の可能性もある土壙の間に隠されたようにも思える。

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多 103						
副書名	博多遺跡群第143次調査報告						
巻次	103						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
はかたいせきぐん 博多遺跡群 第87次	ふくおかし はかたく 福岡市博多区 つばつ ばくた 網場町121番	130	0121	33°35' 52"	130°24' 26"	20030722～ 20031021	303
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
都市	室町時代 戦国時代 (14～16 世紀)	井戸12基 方形大型 土 壤 3 基	粉青沙器 青花、ベト ナム陶器	朝鮮産の陶器、粉青沙器が多く、ベト ナム陶磁器も出土。			

博多 103

- 博多遺跡群第143次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書第849集

2005年(平成17年) 3月31日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印刷 三栄印刷株式会社
福岡市博多区千代一丁目6番1号